

中・高校生の学校生活と進路形成

中等教育の構造と機能に関する研究 (1)

教育社会学研究室 岩 木 秀 夫

School Life and Career Formation in Junior and Senior High School

Hideo IWAKI

In order to get some hint on the consequences of comprehensivization of senior high schools on (1) the relation between parents' social class and the academic achievements of students (2) the formation of self-identity and social-vocational development, this study tried to compare the process in junior high schools and the process in senior high schools whereby (1) the academic achievements is determined by various factors (parents' social class, like and dislike of mathematics or English, academic motivation, etc) (2) the sense of fate control (control over one's own destiny) is strengthened and the crystallization of career choice and vocational preference occurs.

Analysis shows

(1) that there exists correlation between parents' social class and students' academic achievements in junior high schools, but that this correlation disappears in senior high. The cause of this phenomenon is suspected to lie in ① the property of subjects (especially mathematics and English) ② ability and social class composition (heterogeneous in junior-high v.s. homogeneous in senior-high).

(2) that vocational senior-highs strengthen self-identity of students a little more than general or academic senior-highs. This stands against the stereo-typed image of academic-general-vocational schools.

(3) that engineering senior high school exerts an extraordinary strong influence on the crystallization of students' vocational preference. This suggests that it might be difficult to adapt engineering courses to comprehensive senior-high system.

研究の概略

- A 問題意識
- B 調査の課題と枠組
- C 調査の概要

II 調査の結果

- A 学業成績の構造とダイナミズム
- B 生徒の意識の構造とダイナミズム
- C 進路選択のメカニズムと職業選好のダイナミズム

III まとめと今後の課題

附録 調査表

I. 研究の概略—問題意識, 調査の課題と枠組, 調査の概要

A. 問題意識

高校教育のユニバーサル化にともなう生徒の多様化に対応することを主眼として、高校の新学習指導要領が昭和57年度から学年進行で実施されようとしている。卒業単位数や必修時間数の削減、教科編成における学校の自主性の枠の拡大などに見られるように、教育課程、学校経営がここでの政策の中心であり、中等教育制度を点検する視点はここにはない。

個々の学校の自主的な経営努力も確かに大切であり、それによって解決できる問題も皆無とは言えないだろう。だが、これまでの経験によれば、個々の学校の自主的な経営特色の発現を阻むものは、学習指導要領などによる規制より、むしろ高等学校の格差構造などの要因であると言った方が正しいだろう。

すなわち、個々の学校の経営努力にも、中等教育の制度的形態の大枠が立ちふさがっているのである。個々の学校の経営努力によって解決できない種類の第二の問題としては、マイノリティーグループとなった高校非進学者の問題がある。彼等の問題は、まさに中等教育制度の形態に関わる問題である。

他方で、しかしながら、今後の高校教育の制度的な選択肢に関する研究の蓄積は皆無と言ってよい。義務化、中・高一貫制等々の主張が見受けられるが、それらの選択肢がどのような効果を持ち得るかについての判断に役立つような実証的研究はなされていない。このような実証的研究の積み重ねがないことが、政治上や財政上の要因に劣らず、制度的改革を妨げる要因になっていると思われる。

そこで、本研究では、今後の高校教育の制度的な選択肢のうち、最も極端なケース、つまり、中学校型の教育のあと3年間の延長、をとりあげ、それによって高校教育の機能がどう変化するかを考えてみることにした。機能をとらえ評価する基準としては、《教育機会の均等》(学校での学業成績や卒業後の進路における社会階層差の縮小)と、《生徒の自律的個人としての発達》(具体的には、fate control=自分の将来についての確信、の発達)を設定した。教育システムの機能を評価する基準としては、他に、《学力水準の向上》ならびに《労働市場への人材の有機的な配分》の視点があるが、本研究ではとりあげなかった²⁾。

B. 調査の課題と枠組

以上のような問題意識から、本調査では次のような3つの課題を設定し、それを追求することとした。

(1) 学業成績と社会階層の関連は、総合制形態のスクーリングの延長により、弱められるのか強められるのか。

(2) 生徒の自我発達は、総合制形態のスクーリングの延長により、強められるのか弱められるのか。

(3) 生徒の社会的(職業的)発達は、総合制形態のスクーリングの延長により、強められるのか弱められるのか。

この3つの課題のうち(1)は、前述した教育システムの評価基準のうちの教育機会の均等に関連し、(2)と(3)は fate control に関連している。

この3つの課題を設定してみたが、実はこれらの課題を解くための実験計画(調査デザイン)を作ることは不可能である。なぜなら、わが国には総合制形態のスクーリングを延長したかたちの高校教育は存在しないからである。小学・中学の総合制システムから、高校受験を経て、分岐システムへ移行するというが、わが国の青少年の教育経歴の平均像である。したがって、総合制システムと分岐システムが後期中等教育段階で併存するイギリスにおける研究のような問題のたて方はできない³⁾。ただ総合制形態のスクーリングの延長の近似としては、私立学校の一部で行なわれている中高一貫教育がある。そこで当初、私立の中高一貫校から、進学実績などを考えて4校選び、それと、平均的な公立の中学・高校システムとの比較を考え、調査を実施した。しかし私立の中高一貫校の場合、それ自体すでに中学受験を関門とする分岐システムの性格を持つことと、調査対象とした公立中・高システムとあまりに諸属性(所在地域の全般的な学力・進学状況、親の階層など)がかけ離れていることから、直接の比較は断念せざるを得なかった。

そこで、次善の策として、公立の高校とその学区内の中学との比較を行ない、両者の機能を明らかにすることにより、総合制システムと分岐システムの作動(functioning)に関する手がかりを得ることにした。この場合、先の3つの課題は次のように修正される。

α 学業成績と社会階層の関連は、中学と高校でどのように異なっているか。また、そこで見出された差異は、どの程度、分岐システム(もしくは総合制システム)によると考えられるか。

β 生徒の自我発達は、中学校と高校でどのように異なっているか。また、そこで見出された差異は、どの程度、分岐システム(もしくは総合制システム)によると考えられるか。

γ 生徒の社会的(職業的)発達は、中学校と高校でどのように異なっているか。また、そこで見出された差異は、どの程度、分岐システム(もしくは総合制システム)によると考えられるか。

当初案、つまり総合制形態が延長された高校と、分岐システムの高校とを比較する計画に比べて、第二案の弱点は明白である。すなわち、第一案では、生徒の年令的成熟による効果や、中学教育からの累積効果をコントロールすることは容易だが、第二案ではそれがほぼ不可能

である。これは致命的な弱点であり、その都度細心の注意を払いながら追跡調査を重ね、推論の精度を高めることによってしか対処できない。その意味で、今回の調査は、まさにパイロット・スタディである。

C. 調査の概要

1. 調査項目（巻末調査票参照）

課題 α に対応して、質問2では成績順位、成績変化（対前学年、対前学期）、得意科目、不得意科目などを聞いた。中学・高校それぞれの3年間で、成績順位はどのように変動するのか、また、学業成績の階層差を媒介する教科は何か、などを分析するためである。

課題 β に対応して、質問3で勉強や成績に対する態度、質問4で生活の本来感や自我同一感、質問5（選択肢5～8）で自己概念、質問6で学校生活全般に対する態度を、それぞれ聞いた。従来の生徒文化研究では、質問3や質問6に類する質問で、向学校（pro-school）—反学校（anti-school）の軸を中心とする意識類型が見出されてきているが、本調査では生徒の fate control（＝自分の将来についての確信）感をみたくために、質問4ならびに5を加えた。

課題 γ に対応して質問7～10で進路選択について聞き、質問13で職業選好について聞いた。質問13は労働省職業研究所の職業レディネス・テスト（A検査）である⁴⁾。これらについて学年毎に分析し、その変化をみることにより、生徒の進路選択や職業選好の構造とダイナミズムが描けるであろう。

2. 調査の経過

本調査は、昭和54年度科学研究費助成金（奨励研究（A）課題番号401088）の交付を受けて、昭和54年11月～12月上旬にかけて実施した。フィールドは、同時期に実施された教育社会学研究室の調査（『高校生の生徒文化と学校経営に関する研究（研究代表松原治郎）』—今回の学部紀要に同時掲載）と同じ、A県A市とした。高校の対象校は、研究室調査の対象校に依頼し、その他に中学校3校に依頼した。本研究ではこの他に、東京都内の私立中・高一貫校4校をも対象校としたが、前述のような理由で、今回は分析の対象から外した。統計処理に関しては全て東京大学大型計算機センターにおいて実施した。

3. 調査対象の属性

高校はA～Eの5校を対象とした。このうちA～Cは普通科高校、D校は商業高校、Eは工業高校である。A県A市の概況ならびに、A～E校の特性については、本紀要に同時に掲載される『高校生の生徒文化と学校経

営』の第III章に詳述されているので、参照されたい。（A校はA1校、B校はA2校……E校はA5校に対応する。）

中学A校はA市の中心的な商業地域の縁辺に位置する学校である。B校は、宅地化の進行する農業地域に位置している。C校はホワイトカラー層の居住する広大な団地の縁辺に位置している。A～C校のそれぞれは、学区の社会階層構成を反映して、表3（第II章A節）に示すような学歴・職業構成を持っている。

以上の中学3校、高校5校それぞれにつき、第1～3学年各2～3クラス、合計2719名の中・高校生を調査対象とした。

II. 調査の結果

A. 学業成績の構造とダイナミズム

1. 成績（順位）のダイナミズム

質問2cでは前の学期にくらべて、2dでは前の学年にくらべて成績がどう変わったかを、かなりおちた～かなりのびたの5段階で答えてもらった（巻末調査票参照）。この対前学期成績変化と対前学年成績変化をクロスしたのが表1(1)～表1(4)である。表1(1)は成績順位（自己申告）が下位の者、表1(2)は中位の者、表1(3)は上位の者のクロス表である。また、表1(4)は対前学期変化と対前学年変化の方向の一致度（単調相関）を示す Kendall の順位相関係数（ τ_b ）を1つにまとめたものである。これから以下の3点が読みとれる。

①まず表1(4)から、全般に高校よりも中学において成績変化の方向が一貫していることがわかる。換言すれば、成績順位の交代に及び得るほどの明確な変動は、中学段階でより多く起っている。

②次に表1(1)～表1(3)から、中学では下位と中位の間、中位と上位の間にまんべんなく順位交代が起り得るのに対し、高校では中位と上位の間もしくは上位者間にしか起り得ないことがわかる。表1(3)によれば、中学（特に2～3年）では上位固定者（対前学期、対前学年ともにかわらない者）よりも、成績が一貫してのびた上位者（もしくは一貫してのびて上位になった者）がかなり多いのに対し、高校では同等かやや多いくらいである。表1(2)によれば、中学では中位固定者よりも成績が一貫してのびた中位者（もしくは一貫してのびて中位になった者）がやや多いのに対し、高校ではかなり少ない。

③表1(1)から、成績下位者の析出、固定化というのは、中学高校を通じて学年進行につれて最も明確に進行する過程であることがわかる。成績が一貫しておちた下

表 1(1) 成績順位 (自己申告) が下位の者の成績変動

| | | 前の学年にくらべて成績が | | | | | | |
|--|--------|--------------|--------|-------|--------|--------|-----|--|
| | | かなりおちた | すこしおちた | かわらない | すこしのびた | かなりのびた | | |
| 前 の 学 期 に く ら べ て 成 績 が | かなりおちた | 中1 | 16.9 | 2.6 | 3.9 | 0.0 | 0.0 | n = 77(中1) 81(中2) 104(中3) 155(高1) 150(高2) 167(高3) |
| | | 中2 | 21.0 | 2.5 | 1.2 | 1.2 | 0.0 | |
| | | 中3 | 11.5 | 2.9 | 1.9 | 0.0 | 0.0 | |
| | | 高1 | 17.4 | 3.9 | 3.2 | 0.0 | 0.0 | |
| | | 高2 | 14.0 | 3.3 | 1.3 | 0.7 | 0.0 | |
| | | 高3 | 10.8 | 1.2 | 1.2 | 1.8 | 0.0 | |
| | | 高3 | 10.8 | 1.2 | 1.2 | 1.8 | 0.0 | |
| | すこしおちた | 中1 | 10.4 | 18.2 | 1.3 | 0.0 | 0.0 | $\tau_b = .49664$ (中1) .63406(中2) .58601(中3) .21076(高1) .48316(高2) .38962(高3) |
| | | 中2 | 8.6 | 13.6 | 8.6 | 1.2 | 0.0 | |
| | | 中3 | 6.7 | 14.4 | 7.7 | 2.9 | 0.0 | |
| | | 高1 | 11.0 | 5.8 | 5.2 | 0.6 | 0.0 | |
| | | 高2 | 6.0 | 16.0 | 2.7 | 1.3 | 0.0 | |
| | | 高3 | 3.0 | 15.6 | 4.2 | 2.4 | 0.0 | |
| | | 高3 | 3.0 | 15.6 | 4.2 | 2.4 | 0.0 | |
| | かわらない | 中1 | 7.8 | 3.9 | 22.1 | 6.5 | 1.3 | |
| | | 中2 | 0.0 | 6.2 | 21.0 | 3.7 | 0.0 | |
| | | 中3 | 0.0 | 7.7 | 26.0 | 2.9 | 0.0 | |
| | | 高1 | 18.7 | 5.2 | 14.2 | 0.6 | 0.0 | |
| | | 高2 | 5.3 | 10.0 | 26.0 | 4.0 | 0.0 | |
| | | 高3 | 7.2 | 10.2 | 30.5 | 4.2 | 0.0 | |
| | | 高3 | 7.2 | 10.2 | 30.5 | 4.2 | 0.0 | |
| すこしのびた | 中1 | 0.0 | 2.6 | 1.3 | 1.3 | 0.0 | | |
| | 中2 | 0.0 | 2.5 | 1.2 | 7.4 | 0.0 | | |
| | 中3 | 0.0 | 2.9 | 2.9 | 8.7 | 0.0 | | |
| | 高1 | 5.8 | 2.6 | 2.6 | 2.6 | 0.6 | | |
| | 高2 | 2.0 | 1.3 | 1.3 | 4.7 | 0.0 | | |
| | 高3 | 0.6 | 1.2 | 1.2 | 3.6 | 0.0 | | |
| | 高3 | 0.6 | 1.2 | 1.2 | 3.6 | 0.0 | | |
| かなりのびた | 中1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | | |
| | 中2 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | | |
| | 中3 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 1.0 | | |
| | 高1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | | |
| | 高2 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | | |
| | 高3 | 0.0 | 0.0 | 1.2 | 0.0 | 0.0 | | |
| | 高3 | 0.0 | 0.0 | 1.2 | 0.0 | 0.0 | | |

位者 (もしくはおちて下位になった者) が学年進行とともに減るにつれ、下位固定者 (対前学期, 対前学年ともにかわらない者) が顕著に増加する。高校では下位と中位の間の順位交代の可能性が少ないことを反映して、固定者の増加が著しい。

成績がのびたか、おちたかについての生徒の判断は必ずしも成績順位の変動に基づいていないため、成績順位の交代に関する客観的なデータは得られなかった。これは今回の調査票の設計ミスである。

2. 成績 (順位) の社会階層差

今見たように中学では成績 (順位) が変動的で高校では固定的な傾向がある。一般に親の社会階層が高いほど文化的資本のストックが大きく、子どもの学業成績が高くなることは広く知られている。これは、スタート時点における成績の社会階層差になってあらわれるであろう。このスタートにおける階層差は中学や高校で増幅されるだろうか、縮小されるだろうか。成績順位が変動的な中学校では縮小され、固定的な高校では維持ないし増幅されることが予想される。

表 1(2) 成績順位が中位の者の成績変動

| | | 前の学年にくらべて成績が | | | | | | |
|--|--------|--------------|--------|-------|--------|--------|-----|--|
| | | かなりおちた | すこしおちた | かわらない | すこしのびた | かなりのびた | | |
| 前 の 学 期 に く ら べ て 成 績 が | かなりおちた | 中1 | 2.0 | 1.5 | 3.5 | 1.5 | 0.0 | n = 198(中1) 206(中2) 181(中3) 301(高1) 291(高2) 275(高3) |
| | | 中2 | 5.3 | 1.9 | 0.5 | 0.5 | 0.0 | |
| | | 中3 | 5.5 | 3.3 | 2.8 | 1.1 | 0.0 | |
| | | 高1 | 10.6 | 1.3 | 4.7 | 1.0 | 0.3 | |
| | | 高2 | 2.7 | 1.4 | 1.0 | 1.0 | 0.0 | |
| | | 高3 | 4.0 | 2.9 | 1.8 | 2.9 | 0.0 | |
| | すこしおちた | 中1 | 4.5 | 8.1 | 9.1 | 5.1 | 0.0 | $\tau_b = .18408$ (中1) .44931(中2) .42251(中3) .16882(高1) .27803(高2) .25996(高3) |
| | | 中2 | 3.4 | 8.3 | 4.9 | 3.9 | 0.0 | |
| | | 中3 | 3.3 | 11.0 | 5.5 | 8.8 | 0.6 | |
| | | 高1 | 6.0 | 7.6 | 14.0 | 2.7 | 0.0 | |
| | | 高2 | 3.4 | 15.8 | 4.8 | 5.8 | 0.0 | |
| | | 高3 | 2.5 | 12.7 | 9.1 | 5.8 | 1.1 | |
| | かわらない | 中1 | 3.5 | 10.6 | 24.2 | 7.1 | 0.0 | |
| | | 中2 | 3.4 | 7.3 | 13.6 | 9.2 | 1.0 | |
| | | 中3 | 1.1 | 2.8 | 14.4 | 10.5 | 1.1 | |
| | | 高1 | 4.3 | 12.0 | 13.0 | 3.0 | 0.7 | |
| | | 高2 | 2.4 | 11.0 | 20.3 | 8.2 | 0.7 | |
| | | 高3 | 2.2 | 11.6 | 17.8 | 11.6 | 0.0 | |
| | すこしのびた | 中1 | 2.0 | 3.0 | 5.1 | 8.6 | 0.5 | |
| | | 中2 | 0.5 | 5.3 | 7.3 | 18.4 | 3.4 | |
| | | 中3 | 0.0 | 3.3 | 5.5 | 16.6 | 1.7 | |
| | | 高1 | 3.7 | 3.3 | 7.0 | 3.7 | 0.0 | |
| | | 高2 | 1.7 | 5.5 | 2.7 | 10.7 | 0.3 | |
| | | 高3 | 0.7 | 2.2 | 1.5 | 8.7 | 0.4 | |
| かなりのびた | 中1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | | |
| | 中2 | 0.0 | 0.0 | 0.5 | 0.5 | 1.0 | | |
| | 中3 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.6 | 0.6 | | |
| | 高1 | 0.3 | 0.7 | 0.3 | 0.0 | 0.0 | | |
| | 高2 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.3 | | |
| | 高3 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.4 | | |

しかし、成績順位と父親の職業ならびに学歴の関連を示す表2によれば、事実は予想と逆である。表2から以下の3点が読みとれる。

①中学において父親の社会階層と子どもの成績順位は正相関を示す。つまり父親の階層が高いほど子どもの成績が上位である。

②高校では父親の社会階層と子どもの成績は無関連である。むしろ、有意ではないけれども負相関の傾向、つまり、父親の階層が低いほど子どもの成績が良い傾向が、ほの見える。

③中学における正相関は、学年進行とともに弱まる。

まず、中学において正相関があり、高校で無相関なことに関して、第一に、学校の社会階層構成が、中学で異質的 (heterogeneous) なのに対し、高校が同質的 (homogeneous) で、それが原因なのでないか、という疑いが持たれる。クロス表において、周辺度数の分布に偏りがあれば、相関が弱まる確率が高くなるからである。だが表3によれば、その疑いは当たらない。確かに高校の社会階層構成はかなり同質的ではあるが、中学の社会階層構成もそれに劣らず、同質的である。中学の対

表 1(3) 成績順位が上位の者の成績変動

| | | 前の学年にくらべて成績が | | | | | | |
|---|--------|--------------|--------|-------|--------|--------|-----|--|
| | | かなりおちた | すこしおちた | かわらない | すこしのびた | かなりのびた | | |
| 前 の 学 期 に く ら い ら な い で 成 績 が | かなりおちた | 中1 | 0.0 | 2.4 | 0.0 | 1.2 | 1.2 | n = 82(中1) 78(中2) 62(中3) 75(高1) 90(高2) 90(高3) |
| | | 中2 | 2.6 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 1.3 | |
| | | 中3 | 1.6 | 1.6 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | |
| | | 高1 | 2.7 | 0.0 | 1.3 | 4.0 | 0.0 | |
| | | 高2 | 2.2 | 3.3 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | |
| | | 高3 | 3.3 | 2.2 | 2.2 | 0.0 | 0.0 | |
| | | 高3 | 3.3 | 2.2 | 2.2 | 0.0 | 0.0 | |
| | すこしおちた | 中1 | 1.2 | 8.5 | 11.0 | 7.3 | 1.2 | $\tau_b = .11956$ (中1) .46293(中2) .30063(中3) .00050(高1) .35081(高2) .49629(高3) |
| | | 中2 | 7.7 | 9.0 | 2.6 | 0.0 | 1.3 | |
| | | 中3 | 6.5 | 11.3 | 3.2 | 11.3 | 1.6 | |
| | | 高1 | 9.3 | 10.7 | 13.3 | 8.0 | 0.0 | |
| | | 高2 | 1.1 | 6.7 | 7.8 | 7.8 | 1.1 | |
| | | 高3 | 1.1 | 8.9 | 7.8 | 8.9 | 1.1 | |
| | | 高3 | 1.1 | 8.9 | 7.8 | 8.9 | 1.1 | |
| | かわらない | 中1 | 0.0 | 7.3 | 23.2 | 4.9 | 2.4 | |
| | | 中2 | 1.3 | 6.4 | 12.8 | 10.3 | 1.3 | |
| | | 中3 | 3.2 | 8.1 | 14.5 | 9.7 | 3.2 | |
| | | 高1 | 4.0 | 5.3 | 10.7 | 4.0 | 0.0 | |
| | | 高2 | 3.3 | 7.8 | 16.7 | 10.0 | 0.0 | |
| | | 高3 | 1.1 | 6.7 | 11.1 | 11.1 | 2.2 | |
| | | 高3 | 1.1 | 6.7 | 11.1 | 11.1 | 2.2 | |
| | すこしのびた | 中1 | 1.2 | 3.7 | 7.3 | 4.9 | 6.1 | |
| | | 中2 | 1.3 | 5.1 | 6.4 | 24.4 | 1.3 | |
| | | 中3 | 1.6 | 3.2 | 1.6 | 12.9 | 4.8 | |
| 高1 | | 0.0 | 9.3 | 12.0 | 2.7 | 0.0 | | |
| 高2 | | 1.1 | 4.4 | 4.4 | 14.4 | 2.2 | | |
| 高3 | | 0.0 | 2.2 | 2.2 | 15.6 | 6.7 | | |
| 高3 | | 0.0 | 2.2 | 2.2 | 15.6 | 6.7 | | |
| かなりのびた | 中1 | 0.0 | 2.4 | 0.0 | 1.2 | 1.2 | | |
| | 中2 | 0.0 | 0.0 | 1.3 | 1.3 | 2.6 | | |
| | 中3 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | | |
| | 高1 | 1.3 | 0.0 | 1.3 | 0.0 | 0.0 | | |
| | 高2 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 1.1 | 4.4 | | |
| | 高3 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 5.6 | | |
| | 高3 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 5.6 | | |

表 1(4) 対前学期変化と対前学年変化の単調相関 (τ_b)

| 成績順位 | 下位 | 中位 | 上位 |
|------|--------|--------|--------|
| 学 年 | | | |
| 中学1年 | .49664 | .18408 | .11956 |
| 中学2年 | .63406 | .44931 | .46293 |
| 中学3年 | .58601 | .42251 | .30063 |
| 高校1年 | .21076 | .16882 | .00050 |
| 高校2年 | .48316 | .27803 | .35081 |
| 高校3年 | .38962 | .25966 | .49629 |

象校をもっと増やせば、それはもっとはっきりすることになる。輪切り選抜によって学力水準別に層化された高校が結果的に同質的な社会階層構成を持つのが当然なら総合性原理にもとづく中学が学区の社会階層構成を反映して同質的な階層構成を示すのもまた当然である。異質的な階層構成とするためには学区を拡大せねばならないが、そうすると総合制の根本である地域性が損なわれるというのは、良く知られた総合制学校のディレンマである。

したがって、成績と親の社会階層の間に、中学で正相

表2 成績順位(上,中,下)と父職父学歴のクロス

| | 中学1年 | | | | | | 中学2年 | | | | | | 中学3年 | | | | | | | | | | | |
|---|------------------------|---------|-------|-------------------------|------|------|------------------------|---------|---------|-------------------------|-------|------|------------------------|------|---------|---------|-------|-------|-------|------|------|--|--|--|
| | 父職 | | | 父学歴 | | | 父職 | | | 父学歴 | | | 父職 | | | 父学歴 | | | | | | | | |
| | 農,運通,技・生 | 販売,サービス | 事務,保安 | 専門,管理 | 初 | 中 | 高 | 農,運,技・生 | 販売,サービス | 事務,保安 | 専門,管理 | 初 | 中 | 高 | 農,運,技・生 | 販売,サービス | 事務,保安 | 専門,管理 | 初 | 中 | 高 | | | |
| 下 | 27.6 | 28.3 | 20.2 | 5.3 | 35.4 | 17.3 | 11.6 | 21.0 | 25.8 | 16.2 | 14.8 | 30.1 | 15.4 | 16.9 | 35.2 | 38.5 | 22.7 | 16.7 | 26.0 | 29.6 | 32.1 | | | |
| 中 | 55.2 | 51.7 | 59.6 | 51.3 | 50.0 | 57.3 | 56.5 | 62.9 | 56.5 | 60.8 | 50.0 | 53.4 | 64.2 | 43.7 | 48.1 | 53.8 | 56.8 | 53.3 | 58.4 | 52.5 | 44.9 | | | |
| 上 | 17.1 | 20.0 | 20.2 | 43.4 | 14.6 | 25.4 | 31.9 | 16.2 | 17.7 | 23.0 | 35.2 | 16.4 | 20.4 | 39.4 | 16.7 | 7.7 | 20.5 | 30.0 | 15.6 | 17.9 | 23.1 | | | |
| | S=.0000 $\tau_b=.2152$ | | | S=.0001 $\tau_b=.19087$ | | | S=.0021 $\tau_b=.1384$ | | | S=.0004 $\tau_b=.17586$ | | | S=.0007 $\tau_b=.1593$ | | | N. S. | | | N. S. | | | | | |
| | 高校1年 | | | | | | 高校2年 | | | | | | 高校3年 | | | | | | | | | | | |
| 下 | 28.6 | 27.4 | 27.4 | 31.1 | 33.0 | 26.9 | 35.9 | 22.9 | 31.8 | 34.1 | 28.9 | 24.4 | 25.4 | 32.0 | 26.9 | 36.5 | 26.6 | 38.2 | 29.5 | 29.5 | 36.0 | | | |
| 中 | 57.3 | 54.8 | 54.8 | 59.6 | 56.0 | 57.7 | 53.8 | 62.3 | 51.1 | 52.3 | 51.4 | 61.0 | 56.9 | 46.7 | 55.3 | 50.0 | 58.2 | 43.5 | 53.7 | 51.9 | 49.0 | | | |
| 上 | 14.1 | 17.8 | 17.9 | 9.3 | 11.0 | 15.4 | 10.3 | 14.9 | 17.0 | 13.6 | 19.7 | 14.6 | 17.7 | 21.3 | 17.8 | 13.5 | 15.2 | 18.3 | 16.8 | 18.7 | 15.0 | | | |
| | N. S. | | | | | | N. S. | | | | | | N. S. | | | | | | N. S. | | | | | |

表 3 対象校の生徒の社会階層構成

| | | 中学 A | 中学 B | 中学 C | 高校 A | 高校 B | 高校 C | 高校 D | 高校 E |
|-------------|---------------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 父 学 歴 | 初 等 | 25.4 | 33.5 | 12.3 | 13.7 | 17.9 | 24.6 | 34.2 | 36.9 |
| | 中 等 | 54.0 | 51.2 | 56.3 | 49.4 | 54.5 | 52.0 | 48.0 | 47.2 |
| | 高 等 | 20.5 | 15.2 | 31.4 | 36.9 | 27.7 | 23.5 | 17.8 | 15.9 |
| 父 職 | 農・林・漁, 運・通, 技 | 33.5 | 41.1 | 21.7 | 18.4 | 22.9 | 35.4 | 50.5 | 57.9 |
| | 販売, サービス | 21.1 | 14.9 | 17.4 | 16.8 | 13.7 | 16.6 | 20.4 | 10.6 |
| | 事務, 保安 | 24.6 | 31.0 | 24.0 | 18.8 | 25.3 | 19.1 | 12.4 | 11.6 |
| | 専門, 管理 | 20.8 | 13.1 | 36.8 | 46.0 | 38.2 | 28.9 | 16.7 | 19.9 |
| n= | | 382 | 371 | 331 | 260 | 260 | 393 | 368 | 354 |

関があり高校で無相関なこのと原因は、学校の社会階層構成以外のところにもとめなければいけない。

表 4 は、前の学年に比べての成績変化（おちた、かわらない、のびた）と前の学期に比べての成績変化が一致している者の分布（つまり、対前学年変化と対前学期変化のクロス表における主対角線）を、父親の学歴ならびに職業別にみたものである。これによると、中学 1 年と 2 年において、父親の社会階層が低い生徒の間で、成績が一貫して低下する者の比率が、他のグループとくらべて相対的に多いことがわかる。高校ではそのような差異がみられない。すなわち、中学での成績順位の変動は、社会階層の低い生徒を下位の方向へ押しやるかたちで進行するのである。これが、成績と社会階層の間に、中学で正相関があり高校では無相関なことの理由である。もっとも、表 4 で明らかのように、社会階層の低い生徒が下位の方へドリフトするかたちの順位変動は、中学 2 年までで、3 年になると出身階層と関わりのない変動が起る。成績と出身階層の正相関が学年進行とともに弱まることと並んで注目すべき事実である。

3. 成績（順位）の社会階層差の媒体

それでは以上のようなダイナミズムを持つ成績順位を規定する要因は何であろうか。またそれはどのような特質を持ち、第 1, 2 項で見たダイナミズムにどのように関わるであろうか。

成績順位の規定要因をさぐるために、林数量化 I 類を実行した。外的基準は学年のなかでの成績順位（質問 2e）である。順位は下位を 1、上位を 9 とし連続変量とみなす。独立変数は性別、数学の得意～きらい、英語の得意～きらい、AE（知的競争＝academic emulation）得点の高低、父学歴、父職の 6 個である。数学、英語の得意～きらいは、得意科目、きらいな科目の自由記入（質問 2a, b）にもとづき、きらい、どちらでもない、得意、の 3 カテゴリーとした。AE 得点とは、試験で成績が少

しでも下がるとひどく気になる（質問 3a）、先生の説明になつとくできないで質問したり自分で調べたりすることがある（問同 3b）、同級生をライバルだと感じる（質問 3e）、受験や勉強のためにやりたくてもできないことがいっぱいある（質問 3j）、先生や親の期待にこたえるために勉強しなくてはと思うことがある（質問 3k）、試験でよい点をとると、友だちに優越感を感じることがある（質問 3l）の各項目に、Yes と答えた場合を 1 点とし、それを合計したものである。以上の各項目は、生徒の生活意識を構造化する軸の 1 つである勉強拘束（勉強や成績が気になる～ならない）と関連の強いものである。（後述）

実行結果は表 5 のとおりである。重相関係数は中学で 0.47、高校（普通科校 3 校）で 0.41 に過ぎず、使用した 6 個の独立変数で説明できる成績順位はそれぞれ 2 割、2 割弱と、情けないほど小さい。それでも傾向を知る手がかりにはなる。表 5 から次のことがわかる。

① 中学、高校を通じて成績順位の最も重要な規定要因は、数学、英語の得意不得意である。中学では英語の、高校では数学の比重が大きい。

② 教科以外の要因では、中学で父職が、高校で AE 得点がやや重要である。

（以上のパターンは、個別の学校について計算を実行しても、また高校職業科校について実行しても、大差なかった。）

したがって、この結果からみる限り、中学、高校を通じて出身階層より教科要因が成績の規定要因としてはるかに重要であることになる。ところが実は、数学、英語の得意不得意自体、出身階層と無縁でないのである。

表 6 は、数学、英語の得意不得意と父学歴、父職のクロス表である。表 6 は、① 中学で英語、数学の得意不得意が出身階層と正相関するのに対し、高校では無相関、② 数学に比べて英語の方が出身階層との関連が強い、

表 4 父学歴，父職別にみた成績変動（対前学期変化と対前学年変化のクロス表から主対角線を抜き出したもの）

| 前の学年に比べても前の学期に比べても一貫して | | 父 学 歴 | | | 父 職 業 | | | |
|------------------------|-------|----------------|----------------|----------------|-----------------------|---------------|---------------|----------------|
| | | 初 等 | 中 等 | 高 等 | 農・林・漁， 運輸通信， 技能 | 販売，サー ビス | 事務，保安 | 専門，管理 |
| 中学 一年 | おちた | 36.1 | 16.9 | 17.1 | 23.1 | 27.9 | 18.4 | 19.5 |
| | かわらない | 15.7 | 29.0 | 22.9 | 24.0 | 18.0 | 22.4 | 27.3 |
| | のびた | 6.0 | 9.3 | 7.1 | 7.7 | 4.9 | 11.2 | 9.1 |
| | N= | 83 (100.0) | 183 (100.0) | 70 (100.0) | 104 (100.0) | 61 (100.0) | 98 (100.0) | 77 (100.0) |
| 中学 二年 | おちた | 27.4 | 21.3 | 22.5 | 23.8 | 18.0 | 29.7 | 23.6 |
| | かわらない | 12.3 | 15.2 | 16.9 | 18.1 | 11.5 | 12.2 | 14.6 |
| | のびた | 23.3 | 18.9 | 21.1 | 24.8 | 23.0 | 23.0 | 15.7 |
| | N= | 73 (100.0) | 164 (100.0) | 71 (100.0) | 105 (100.0) | 61 (100.0) | 74 (100.0) | 89 (100.0) |
| 中学 三年 | おちた | 20.8 | 28.9 | 26.6 | 18.5 | 37.7 | 23.9 | 24.2 |
| | かわらない | 18.2 | 16.7 | 19.0 | 16.7 | 13.2 | 23.9 | 14.5 |
| | のびた | 15.6 | 16.7 | 15.2 | 16.7 | 7.5 | 23.9 | 17.7 |
| | N= | 77 (100.0) | 180 (100.0) | 79 (100.0) | 108 (100.0) | 53 (100.0) | 88 (100.0) | 62 (100.0) |
| 高校 一年 | おちた | 26.2 | 28.3 | 31.3 | 32.8 | 28.6 | 25.0 | 22.8 |
| | かわらない | 15.9 | 13.8 | 7.1 | 13.8 | 14.3 | 13.7 | 11.0 |
| | のびた | 4.7 | 3.6 | 1.8 | 3.2 | 0.0 | 0.0 | 4.8 |
| | N= | 107 (100.0) | 247 (100.0) | 112 (100.0) | 189 (100.0) | 70 (100.0) | 80 (100.0) | 145 (100.0) |
| 高校 二年 | おちた | 22.8 | 27.3 | 25.8 | 26.4 | 27.0 | 26.4 | 27.6 |
| | かわらない | 25.2 | 21.2 | 21.8 | 23.0 | 24.7 | 24.1 | 15.9 |
| | のびた | 12.2 | 9.5 | 12.9 | 9.8 | 10.1 | 9.2 | 13.8 |
| | N= | 123 (100.0) | 231 (100.0) | 124 (100.0) | 174 (100.0) | 89 (100.0) | 87 (100.0) | 145 (100.0) |
| 高校 三年 | おちた | 21.6 | 23.8 | 27.0 | 22.6 | 20.3 | 24.7 | 26.7 |
| | かわらない | 18.2 | 23.4 | 18.0 | 20.7 | 24.3 | 18.5 | 19.8 |
| | のびた | 8.1 | 11.1 | 10.0 | 10.1 | 8.1 | 6.2 | 13.0 |
| | N= | 148 (100.0) | 244 (100.0) | 100 (100.0) | 208 (100.0) | 74 (100.0) | 81 (100.0) | 131 (100.0) |

の2点を示している。このように中学校において英語、数学の、特に英語の得意不得意は父親の階層と関連しているのである。したがって、表5にもどるならば、中学において成績に対する父親の階層の規定力は、英語、数学を経由する部分を含めるなら、偏相関係数の物語る以上に大きいと言わなければいけない。そして、このことは、中学で成績順位と親の階層が正相関する（2項で述

べた）ことと符合している。

更に表7によれば、数学、英語の得意不得意は成績変動（特に低下）の重要な決め手であることがわかる。それは特に中学1年、中学2年で顕著である。第2項で、父親の社会階層が低い生徒の間に成績が一貫して低下する者の比率が、中学1年2年で多いことをみたが、そこで実は数学、英語が重要な役割を果たしているのである。

表 5 成績順位 (下位 1~上位 9) の規定要因 (林 I 類)

| 中 学 3 校 計 | | | | 高 校 普 通 科 3 校 計 | | | |
|-----------|---|------------------------------------|-------|-----------------|---|-------------------------------------|--------|
| 項 目 | カ テ ゴ リ ー | カテ ゴリ ー ウェイト | 偏 相 関 | 項 目 | カ テ ゴ リ ー | カテ ゴリ ー ウェイト | 偏 相 関 |
| 性 別 | 男 女 | -.0314 .0323 | .0189 | 性 別 | 男 女 | -.1143 .2009 | .0794 |
| 数 学 | 得 意 どちらともいえない き ら い | .5370 .1489 -.6337 | .2509 | 数 学 | 得 意 どちらともいえない き ら い | 1.1651 -.0636 -.6266 | .2941 |
| 英 語 | 得 意 どちらともいえない き ら い | .8270 .1630 -.7577 | .3153 | 英 語 | 得 意 どちらともいえない き ら い | .9957 .0167 -.5782 | .2461 |
| AE 得点 | 0 点 1~3 点 4~6 点 | -.6783 -.0077 .0541 | .0765 | AE 得点 | 0 点 1~3 点 4~6 点 | -.1368 -.1724 .3311 | .1249 |
| 父 学 歴 | 初 等 中 等 高 等 | -.1943 .0229 .1473 | .0670 | 父 学 歴 | 初 等 中 等 高 等 | .0012 .1161 -.2162 | .0758 |
| 父 職 | 農・林・漁、運輸通 信技能・生産工程 販売、サービ ス 事 務、保 安 専 門、管 理 | -.2016 -.4151 .1046 .4507 | .1724 | 父 職 | 農・林・漁、運輸通 信技能・生産工程 販売、サービ ス 事 務、保 安 専 門、管 理 | .2514 -.0477 -.1405 -.0903 | .08412 |
| 重 相 関 係 数 | | .4672 | | 重 相 関 係 数 | | .4086 | |

以上を要約して言えば、中学の英語、数学は、成績に対する社会階層の影響力の重要な媒体である。英語に関してだけは同じことが高校段階でも言える。実証データから離れてさらに思弁的に言えば、英語教科ならびに中学の数学教科は文化的資本に親和的な特質を持っているのである。ただし、教科のこのような特質が、成績と社会階層が中学で正相関し高校で無相関なことの原因であると断定できるかどうかは疑問である。これまでの分析では隠されていた要因 X が、成績順位と階層の関連の有無の有効な原因であるケースも捨てきれないからである。(要因 X として現在考えているのは、生徒集団の社会階層構成と能力 (IQ) 構成である。成績順位と社会階層が中学で正相関し高校で無相関なことに対して、社会階層構成が原因と考えられないことは第 2 項で述べた。しかし、高校の生徒集団の構成のもう 1 つの特色である能力 (IQ) の同質編成 (= 輪切り選抜による) についてはまだ疑いを捨てきれない。能力 (IQ) が同質的に編成された集団のなかで、成績順位も成績変動も階層と

の関わりを失なうことはじゅうぶん考えられるからである。)

以上 2 つのケースを図示すると図 1 のようになる。これまでの分析ではモデル 1 が成立しそうであるが、モデル 2 の可能性も否定できない。どちらが正しいのか、或いは両方の複合が良い説明ないか、今後の課題として残されている。

B. 生徒の意識の構造とダイナミズム

1. 意識の構造

授業や勉強、成績に関する質問 3 (項目は a~m)、および、自我同一感に関する質問 4, 5 (質問 4 は項目 a~d、質問 5 は項目 (6)~(8)、対学校感情に関する質問 6 (項目は a~g) を一緒にし、それに対して林の数量化 III 類によるパターン分類を試みた。

まず、中学では、固有値 0.13 の第 I 軸と 0.08 の第 II 軸を組み合わせると、生徒の反応のバラツキの 21.2% が説明される。I 軸と II 軸による座標上に全質問項目

表6 数学、英語の得意～さらいと父職、父学歴のクロス

| | 父学歴 | | | | 父職 | | | | 父学歴 | | | | 父職 | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|-----|------------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|--------------|------|---------|------|-----------------|-------------------------------|--------|-----|-----|-----|-----|-------------------------------|-----|-----|-----|-----|
| | 初等 | | 中等 | | 高等 | | 初等 | | 中等 | | 高等 | | 農林漁業・運通, 技・生 | | 販売, サビス | | 事務, 保安 | | 専門, 管理 | | | | | | | | | |
| | い | ない | い | ない | い | ない | い | ない | い | ない | い | ない | い | ない | い | ない | い | ない | い | ない | | | | | | | | |
| 中 学 | 数学 | き | 29.4 | 33.0 | 30.9 | 33.1 | 39.2 | 30.5 | 27.2 | 37.4 | 30.3 | 26.4 | 35.9 | 27.3 | 34.0 | 24.1 | n= 235 N. S. | S= .0003 $\tau_b = .0993$ | 英語 | 320 | 176 | 262 | 228 | S= .0002 $\tau_b = .10035$ | 320 | 176 | 262 | 228 |
| | | どち らとも いえない 意 | 51.9 | 44.8 | 49.1 | 48.7 | 40.9 | 48.9 | 47.4 | 50.2 | 52.0 | 50.0 | 52.2 | 55.1 | 45.4 | 52.2 | | | | | | | | | | | | |
| 高 校 | 数学 | き | 31.2 | 25.6 | 33.1 | 31.4 | 25.4 | 25.0 | 30.6 | 33.2 | 25.7 | 27.0 | 29.5 | 31.4 | 24.6 | 27.3 | n= 385 N. S. | S= .0058 $\tau_b = .06003$ | 英語 | 576 | 236 | 256 | 432 | S= .0002 $\tau_b = .10035$ | 576 | 236 | 256 | 432 |
| | | どち らとも いえない 意 | 50.1 | 58.8 | 49.1 | 52.4 | 55.5 | 55.1 | 54.6 | 54.5 | 59.6 | 55.2 | 55.7 | 54.2 | 62.5 | 58.3 | | | | | | | | | | | | |

表7 数学, 英語の得意不得意と成績変化

| | | 中 1 | 中 2 | 中 3 | 中 学 計 | 高 1 | 高 2 | 高 3 | 高 校 計 | |
|---------|-----------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|
| 一貫しておちた | n=(100.0) | 79 | 92 | 93 | 264 | 154 | 140 | 126 | 420 | |
| | 数学 | とくい | 19.0 | 13.0 | 9.7 | 13.6 | 13.6 | 13.6 | 14.3 | 13.8 |
| | | きらい | 39.2 | 44.6 | 41.9 | 42.0 | 37.0 | 30.0 | 32.5 | 33.3 |
| | 英語 | とくい | 8.9 | 16.3 | 14.0 | 13.3 | 12.3 | 15.7 | 15.1 | 14.3 |
| きらい | | 34.2 | 44.6 | 39.8 | 39.8 | 40.9 | 25.0 | 27.8 | 31.7 | |
| 一貫してのびた | n=(100.0) | 30 | 77 | 56 | 163 | 18 | 60 | 57 | 135 | |
| | 数学 | とくい | 36.7 | 28.6 | 17.9 | 26.4 | 22.2 | 21.7 | 19.3 | 20.7 |
| | | きらい | 10.0 | 32.5 | 23.2 | 25.2 | 22.2 | 25.0 | 36.8 | 29.6 |
| | 英語 | とくい | 46.7 | 26.0 | 12.5 | 25.2 | 27.8 | 20.0 | 21.1 | 21.5 |
| きらい | | 10.0 | 23.4 | 42.9 | 27.6 | 5.6 | 13.3 | 17.5 | 14.1 | |

注. 成績が前学年に比べても, 前学期に比べても一貫しておちた者, 及び一貫してのびた者だけをとり出した.

をプロットすると, 図2のようになる。全体的にみると各項目は4つの象限にわたって分散しており, I 軸, II 軸の組み合わせによるパターン分類が無意味ではないことがわかる。ただし些細にみると, 質問4と5の各項目は, 第2象限ならびに第4象限に集中している。これは, 質問4と5の各項目が, それだけで独自の構造を持つ, やや異質のかたまりを成すということを示している。だがそれは, 質問3ならびに6の各項目と, 図2のような結合を成すことの意味を消し去るものではない。

図2のままでは軸 I, II 軸の意味, ならびに4つの象限の性格がはっきりしないので各軸に対するカテゴリー・スコアの高い順に, 各項目を列挙したのが表8(1)(2)である。カテゴリー・スコアの高い項目ほど軸の性格をよく表現することを念頭におくと, 次のようなことがわかる。

①第 I 軸のマイナス方向では, 「自分は先生に気に入られていると思う」「この学校での生活にははりあいがある」「一日一日が充実している感じ」「この学校の生徒であることにほこりを感じる」などのスコアが高く, プラス方向では, 「この学校にはどうしてもとけこめない」「どうせ自分はだめな人間だと思う」「学校の授業は時間のむだと思うことがある」「自分は先生にきらわれていると思う」などのスコアが高い。つまり, 第 I 軸は学校生活への適応をあらわす軸で, マイナス方向は〈学校生活適応〉を, プラス方向は〈学校生活不適応〉を意味している。

②第 II 軸のマイナス方向では, 「試験でよい点をとる

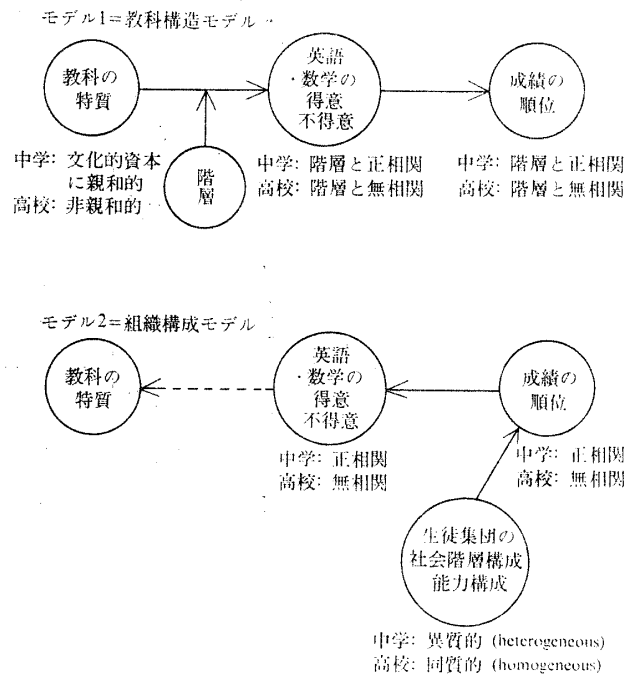


図1 成績と社会階層の関連についてのモデル

と友だちに優越感を感じることもある」「自分は先生に気に入られていると思う」「また失敗するのではないかといつも不安だ」「同級生をライバルだと感じることもある」などのスコアが高く, プラス方向では, 「先生や親の期待にこたえるために勉強しなくては, と思わない」「受験や勉強のために, やりたくてもできないことがいっぱいある, と思わない」「自分らしく生きているとなっとくできる感じ」「同級生をライバルだと感じる, こ

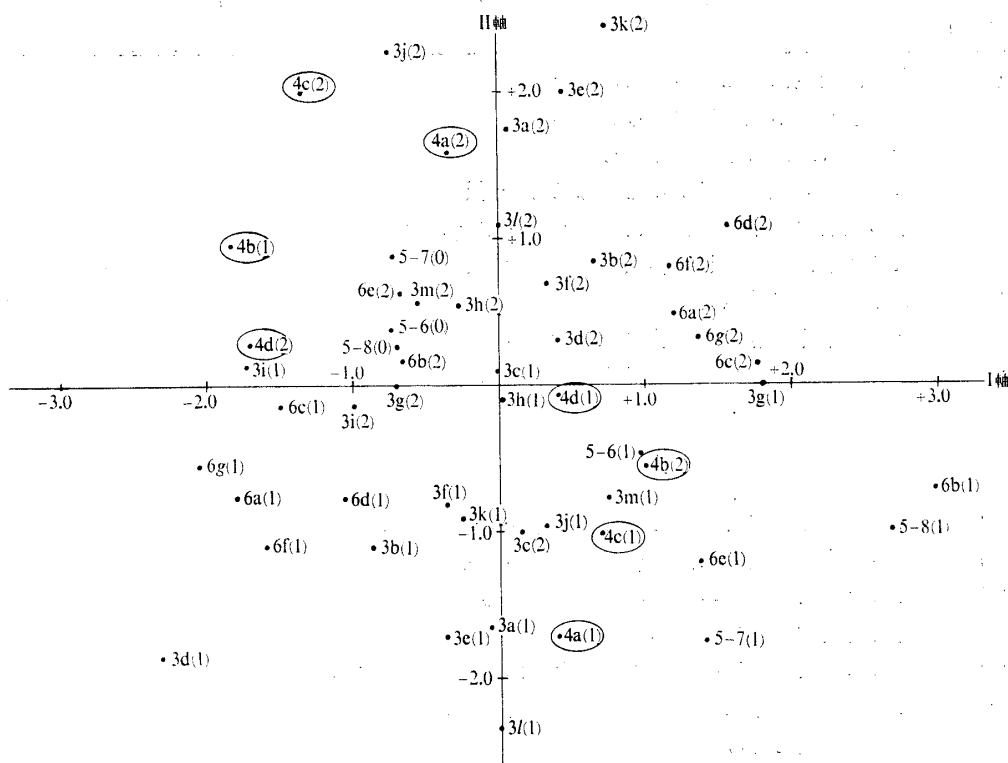


図 2 各カテゴリーのカテゴリー・スコア (中学)

- (注1) 最初の数字=質問番号, 2番目のアルファベットもしくは数字=質問項目
 カッコ内の数字=選択肢ただし, 質問5の場合0=非該当, 1=該当
- (注2) 第I軸の固有値 0.13, 第II軸の固有値 0.08, I軸とII軸の累積説明率は 21.1%

とはない」などのスコアが高い。

これらから判断すると, 第II軸は勉強や成績による拘束をあらわす軸で, マイナス方向は〈勉強拘束〉を, プラス方向は〈勉強非拘束〉を意味している。

③以上から, 今回の調査票の質問項目を用いる限りにおいて, また, 全体のバラツキの2割にすぎない範囲内ではあるが, 中学生の意識は, 〈学校生活適応〉↔〈学校生活不適応〉の軸と, 〈勉強拘束〉↔〈勉強非拘束〉の軸の組み合わせによって構造化される。

次に, 高校では, 固有値0.14の第I軸と0.08の第II軸を組み合わせると, 生徒の反応のバラツキの22.2%が説明される。I軸とII軸を組み合わせた座標軸上に全質問項目をプロットすると, 図3のようになる。質問4の各項目が第1象限と第3象限にしかあらわれないことは, 中学の場合に類似している。ただ中学と違うのは, 質問4の各項目のカテゴリー・スコアの分散が, 第I軸上よりも第II軸上においてより大きい。また, 質問3の各項目が, 中学と比べ, 特定象限(第2象限と第4象限)に集中する傾向が強い。これらの意味については改めて考察することとする。各軸に対するカゴテリ

ー・スコアの高い順に各項目を列挙すると, 表9(1)(2)のようになる。この表から以下のことがわかる。

④第I軸のマイナス方向では, 「この学校での生活にははやりあいがある」「自分は先生に気に入られていると思う」「この学校には信用して相談できる先生がいる」「この学校の生徒であることにほこりを感じる」などのスコアが高く, プラス方向では, 「この学校にはどうしてもとけこめない」「自分は先生にきらわれていると思う」「どうせ自分はだめな人間だと思う」「この学校は自分によく合っている,と思わない」などのスコアが高い。つまり, 中学の場合と同じく, 第I軸は学校生活への適応をあらわす軸で, マイナス方向は〈学校生活適応〉を, プラス方向は〈学校生活不適応〉を意味している。

⑤第II軸のマイナス方向では, 「自分らしく生きていくなっとくできる感じ」「一日一日が充実している感じ」「今の生活は将来の自分にとって有意義な感じがする」「先生や親の期待にこたえるために勉強しなくては,と思わない」などのスコアが高く, プラス方向では, 「試験で成績が少しでも下がるとひどく気になる」「また失敗するのでないかといつも不安だ」「自分は先生に気

表 8(1) カテゴリー・スコア (中学・I 軸)

第 I 軸 (中学)

| | | |
|--------|-----------------------------|-------|
| Q3 (d) | 自分は先生に気に入られていると思う | -2.33 |
| Q6 (g) | この学校での生活にははりあいがある | -2.06 |
| Q4 (b) | 一日一日が充実している感じ | -1.82 |
| Q6 (a) | この学校の生徒であることにほこりを感じる | -1.80 |
| Q4 (d) | 今の生活は将来の自分にとって有意義な感じがする | -1.71 |
| Q6 (f) | この学校には信用して相談できる先生がいる | -1.61 |
| Q6 (c) | この学校は自分によく合っている | -1.51 |
| Q4 (c) | 自分らしく生きていくなっとくできる感じ | -1.35 |
| Q6 (d) | この学校には親しみのもてる先生がいる | -1.06 |
| | ⋮ | |
| | (中間部分省略) | |
| | ⋮ | |
| Q6 (a) | この学校の生徒であることにほこりを感じる, ことはない | 1.23 |
| Q6 (g) | この学校での生活にははりあいがある, と思わない | 1.38 |
| Q6 (e) | この学校にいて危険を感じることもある | 1.38 |
| Q5 (7) | また失敗するのではないかといつも不安だ | 1.40 |
| Q6 (d) | この学校には親しみのもてる先生がいる, と思わない | 1.58 |
| Q6 (c) | この学校は自分によく合っている, と思わない | 1.68 |
| Q3 (i) | 自分は先生にきらわれていると思う | 1.72 |
| Q3 (g) | 学校の授業は時間のむだだと思うことがある | 1.80 |
| Q5 (8) | どうせ自分はだめな人間だと思う | 2.66 |
| Q6 (b) | この学校にはどうしてもとけこめない | 2.98 |

表 8(2) カテゴリー・スコア (中学・II 軸)

第 II 軸 (中学)

| | | |
|--------|----------------------------------|-------|
| Q3 (l) | 試験でよい点をとると友だちに優越感を感じることもある | -2.36 |
| Q3 (d) | 自分は先生に気に入られていると思う | -1.85 |
| Q5 (7) | また失敗するのではないかといつも不安だ | -1.74 |
| Q3 (e) | 同級生をライバルだと感じることもある | -1.73 |
| Q4 (a) | 時間におわれている感じ | -1.72 |
| Q3 (a) | 試験で成績が少しでも下がるとひどく気になる | -1.67 |
| Q6 (e) | この学校にいて危険を感じることもある | -1.21 |
| Q3 (b) | 先生の説明になっとくできないで質問したり自分で調べたりする | -1.12 |
| Q6 (f) | この学校には信用して相談できる先生がいる | -1.11 |
| Q4 (c) | 今の自分はなにかほんとうの自分でない感じ | -1.04 |
| Q3 (c) | 授業中よりも休み時間のおしゃべりが楽しい, と思わない | -1.04 |
| | ⋮ | |
| | (中間部分省略) | |
| | ⋮ | |
| Q3 (l) | 試験でよい点をとると友だちに優越感を感じる, ということはない | 1.08 |
| Q6 (d) | この学校には親しみの持てる先生がいる, と思わない | 1.09 |
| Q4 (a) | かなり自分なりに自由にやっている感じ | 1.58 |
| Q3 (a) | 試験で成績が少しでも下がるとひどく気になる, ことはない | 1.76 |
| Q3 (e) | 同級生をライバルだと感じる, ことはない | 2.02 |
| Q4 (c) | 自分らしく生きていくなっとくできる感じ | 2.02 |
| Q3 (j) | 受験や勉強のために, やりたくてもできないこといっぱい, でない | 2.27 |
| Q3 (k) | 先生や親の期待にこたえるために勉強しなくては, と思わない | 2.65 |

表 9(1) カテゴリー・スコア (高校・I 軸)

第 I 軸 (高校)

| | | |
|-------|----------------------------|-------|
| Q6(g) | この学校での生活にははりあいがある | -2.98 |
| Q3(d) | 自分は先生に気に入られていると思う | -2.33 |
| Q6(f) | この学校には信用して相談できる先生がいる | -2.16 |
| Q6(a) | この学校の生徒であることにほこりを感じる | -2.05 |
| Q4(d) | 今の生活は将来の自分にとって有意義な感じがする | -1.92 |
| Q6(c) | この学校は自分によく合っている | -1.83 |
| Q4(b) | 一日一日が充実している感じ | -1.63 |
| Q4(c) | 自分らしく生きているとなっとくできる感じ | -1.45 |
| Q6(d) | この学校には親しみのもてる先生がいる | -1.40 |
| | ⋮ | |
| | (中間部分省略) | |
| | ⋮ | |
| Q6(g) | この学校での生活にははりあいがあると、思わない | 1.17 |
| Q6(e) | この学校にいて危険を感じることもある | 1.20 |
| Q6(a) | この学校の生徒であることにほこりを感じる、ことはない | 1.50 |
| Q6(d) | この学校には親しみのもてる先生がいる、と思わない | 1.58 |
| Q6(c) | この学校は自分によく合っている、と思わない | 1.72 |
| Q5(8) | どうせ自分はだめな人間だと思う | 1.75 |
| Q3(i) | 自分は先生にきらわれていると思う | 1.88 |
| Q6(b) | この学校にはどうしてもとけこめない | 2.67 |

表 9(2) カテゴリー・スコア (高校・II 軸)

第 II 軸 (高校)

| | | |
|-------|--------------------------------|-------|
| Q4(c) | 自分らしく生きているとなっとくできる感じ | -3.12 |
| Q4(b) | 一日一日が充実している感じ | -2.57 |
| Q4(d) | 今の生活は将来の自分にとって有意義な感じがする | -2.23 |
| Q3(k) | 先生や親の期待にこたえるために勉強しなくては、と思わない | -1.86 |
| Q3(j) | 受験や勉強のために、やりたくてもできないこといっぱい、でない | -1.80 |
| Q4(a) | かなり自分なりに自由にやっている感じ | -1.46 |
| Q3(e) | 同級生をライバルだと感じる、ことはない | -1.30 |
| | ⋮ | |
| | (中間部分省略) | |
| | ⋮ | |
| Q4(b) | 毎日がむなしくすぎていく感じ | 1.08 |
| Q3(j) | 受験や勉強のために、やりたくてもできないことがいっぱいある | 1.14 |
| Q3(k) | 先生や親の期待にこたえるために勉強しなくてはと思うことがある | 1.20 |
| Q4(c) | 今の自分はなにかほんとうの自分でない感じ | 1.29 |
| Q5(8) | どうせ自分はだめな人間だと思う | 1.37 |
| Q3(b) | 先生の説明になっとくできないで質問したり自分で調べたりする | 1.43 |
| Q4(a) | 時間におわれている感じ | 1.56 |
| Q3(l) | 試験でよい点をとると友だちに優越感を感じることもある | 1.58 |
| Q3(e) | 同級生をライバルだと感じることもある | 1.97 |
| Q3(d) | 自分は先生に気に入られていると思う | 2.02 |
| Q5(7) | また失敗するのではないかといつも不安だ | 2.32 |
| Q3(a) | 試験で成績が少しでも下がるとひどく気になる | 2.44 |

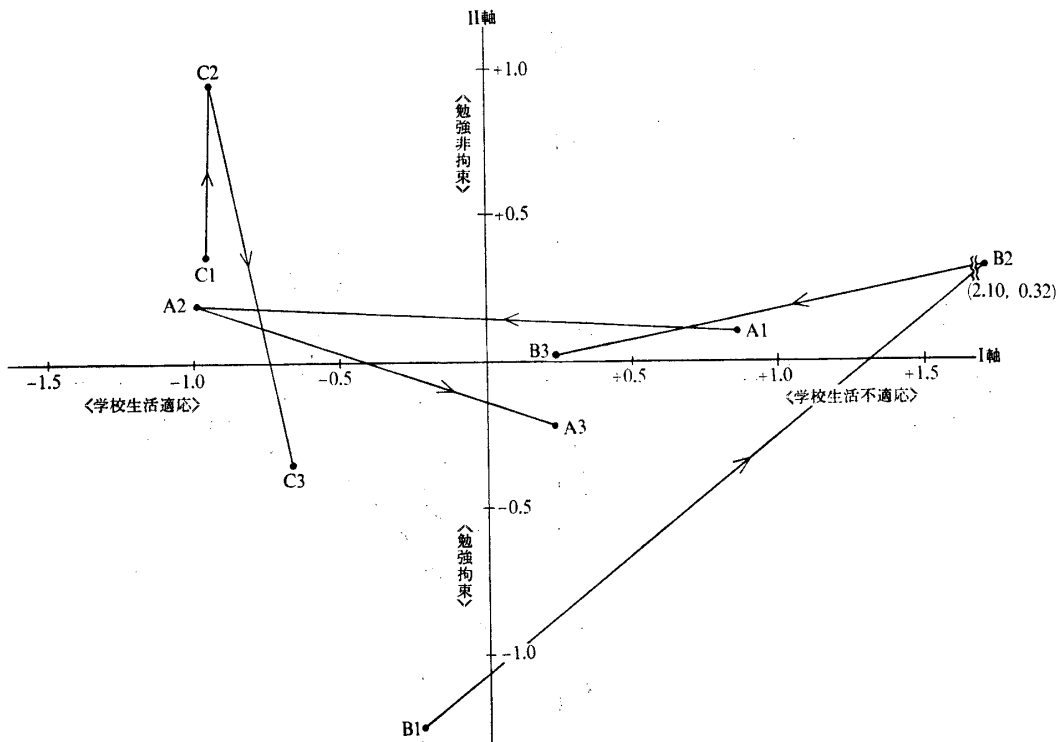


図 4 学校・学年別平均スコア (中学) ($\times 10^{-1}$)

(注) 例えば A1 は A 校の 1 学年をさす。

(4b(2) = 「毎日がむなしくすぎていく感じ」) 最小値が -1.92 (4d(2) = 「今の生活は将来の自分にとって有意義な感じがする」) で、レンジは 2.61 である。第 II 軸上では、最大値が $+1.56$ (4a(1) = 「時間におわれている感じ」) 最小値が -3.12 (4c(2) = 「自分らしく生きているとなっとくできる感じ」) で、レンジは 4.68 である。

このことは、次の 2 点を物語っている。

① 中学では、生活の本来感、自我同一感などは学校生活つまり集団生活場面への適応と、まだ複合したままであるが、高校では集団生活場面への適応と分離し、より一層学習を核とする自分自身の行為との関連を深める。つまり、生活の本来感 (非本来感)、自我同一感 (非同一感) などは、高校においてより本物となる。

② 学校生活への適応を高めること、つまり向学校的態度を強化することは、中学では生活の本来感・自我同一感を高めることにつながり得るが、高校では必ずしもつながらない。

次に、学校・学年別のサン・プルスコアの平均点の動きをみてみよう。中学については図 4、高校については図 5 に示してある。この 2 つの図から以下のことがわかる。

③ 中学では、学校学年ごとの平均点が、重なり合う部分が多い。これは、中学生の意識の分布と動きが、学

校・学年よりも別の要因によって、より整合的に説明されることを意味している。逆に言えば、中学生の意識は、どの学校・学年に属するかによって、それほど大きく異なるならない。

④ 高校では、これとちがいで、学校・学年ごとの平均点が重なり合うことはない (唯一の例外は E 校の 2 年の平均点である)。つまり、高校生の意識の分布と動きは、学校・学年によって、かなり説明できる。各学校の平均点 (3 つの学年によって作られる三角形の重心) が、互いにかけて離れていることからすると、高校生の意識は、どの学校に属するかによって大きく異なる、と言える。

⑤ 高校普通科 A, B, C 校、職業科高校 D, E の分布から、3 校どうし、2 校どうしの微細な違いを無視して言えば、次のことが言える。普通科の高校生の意識は「学校生活適応」と「勉強拘束・非本来感・自我非同一感」によって特色づけられ、職業科の高校生の意識は「学校生活不適応」と「勉強非拘束・本来感・自我同一感」によって特色づけられる。つまり、普通科の生徒は、先生や親の期待を背負いながら、勉強や成績に拘束され、今の自分はなにか本当の自分でないと感じつつ、将来とのつながりのはっきりしないむなしい毎日を、時間におわれながら過ごす、という代償を払う代わりに、学校生活への適応を享受する。これに対し、職業科の生徒

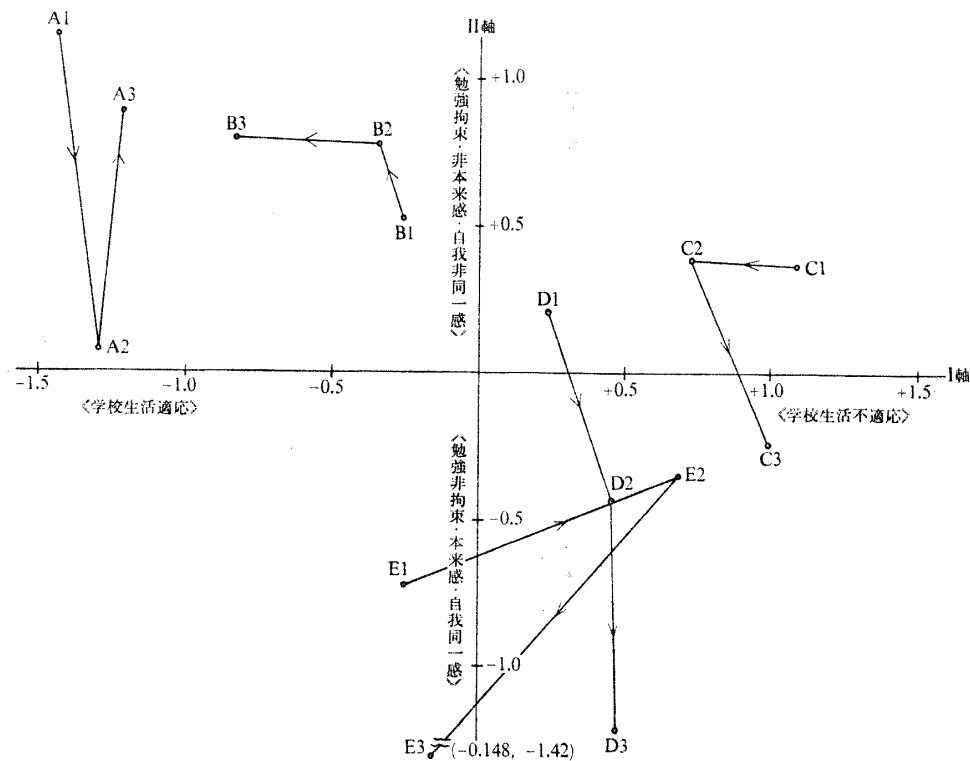


図 5 学校・学年別平均スコア (高校) ($\times 10^{-1}$)

(注) 例えば B 2 は B 校の 2 学年をさす。

は、学校生活への不適応という代償を払う代わりに、勉強や成績の重圧から解放され、将来とのつながりがはっきりしている充実した毎日を、自分なりに自由に、自分らしく生きているとなってくしつ過ごす。過大に評価はできないがこのような傾向がうかがわれる。

⑥高校では、学年進行とともに II 軸のプラス方向への動きの分化が進行する。つまり、普通科高校では、より「勉強拘束・非本来感・自我非同一感」の方向への動きが強まり、職業科高校では「勉強非拘束・本来感・自我同一感」の方向への動きが強まる。このことが先に述べた①に関連することは明らかであろう。

C. 進路選択のメカニズムと職業選好のダイナミズム

1. 進路選択のメカニズム

質問 10 では高校卒業後の進路を聞いた。(巻末調査票参照) この選択肢から、高卒後の進路について、「就職か大学進学か」「短大・専修・各種学校進学か四年制大学進学か」「私立四年制大学進学か国公立四年制大学進学か」の 3 種類のダイコトミー (2 分岐) が得られる。この 3 種類それぞれについて、ダイコトミーを外的基準として、林の数量化 II 類による判別分析を実行した。説明変数は性別、成績、学校、父親の学歴、父親の職業の 5 個である。成績は、成績順位 (自己申告) の 3 カテ

ゴリー (上, 中, 下) である。学校は、所属する学校 (中学では A~C 校の 3 カテゴリー, 高校では A~E 校の 5 カテゴリー, 高校普通科は A~C 校の 3 カテゴリー) である。父親の学歴は、質問 11 の選択肢を、初等 (旧制小学校, 新制中学校), 中等 (旧制中学校, 実業学校, 師範学校, 新制高校, 新制短大・高専), 高等 (旧制高校, 高等専門学校, 高等師範学校, 旧制大学・大学院, 新制大学・大学院) の 3 カテゴリーにした。父親の職業は、質問 12 の選択肢を、I (農業漁業, 運輸通信, 技能・生産工程), II (販売関係, サービス関係), III (事務関係, 保安関係), IV (専門・技術職関係, 管理職関係) の 4 カテゴリーとした。

中学の各学年, 高校の各学年, 高校普通科 3 校の各学年について判別分析を実行した結果は、表 10 に示してある。また、表 10 で※印を付した中学 3 年, 高校 3 年, 普通科高校 3 年については、表 10 作成のもととなった、実際の計算結果を例示した。それが表 11 である。表 10 および表 11 から次のことがわかる。

説明変数の規定力の順位をみると、中学では成績、学校、社会階層 (父親の学歴や職業) の順に強く、高校では、学校、社会階層、成績の順に強い。この傾向は、中学、高校ともに学年進行につれて明確になる。高校段階で学校が進路決定に対して持つ影響力は強力なもので、

表 10 進路の判別—全学年について、判別成功率と説明変数の規定力(偏相関)順位のみ

| | | ※ | | | ※ | | | ※ | | |
|-------------------------|-----------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| 外的基準 | | 中学1年 | 中学2年 | 中学3年 | 高1年 | 高2年 | 高3年 | 普高1年 | 普高2年 | 普高3年 |
| 就職 ↑ ↓ 進学 | 判別成功率 | 72.2% | 67.6% | 67.0% | 82.1% | 81.8% | 79.1% | 72.9% | 79.1% | 79.0% |
| | 説明変数の規定力(偏相関)順位 | 成績 学校 父学歴 父職 性別 | 父職 成績 性別 学校 父学歴 | 成績 学校 父職 父学歴 性別 | 学校 父職 成績 性別 父学歴 | 学校 性別 父学歴 父職 成績 | 学校 父職 父学歴 成績 性別 | 成績 父学歴 学校 性別 父職 | 性別 学校 父学歴 成績 父職 | 学校 父学歴 父職 性別 成績 |
| 短大・専修 ↑ ↓ 4年制大 | 判別成功率 | 73.8% | 72.1% | 81.7% | 77.4% | 75.9% | 81.8% | 70.6% | 72.7% | 77.9% |
| | 説明変数の規定力(偏相関)順位 | 成績 性別 父学歴 父職 学校 | 性別 成績 父職 父学歴 学校 | 成績 性別 父職 学校 父学歴 | 学校 性別 父学歴 父職 成績 | 学校 性別 成績 父学歴 父職 | 学校 性別 父学歴 成績 父職 | 性別 学校 父学歴 成績 父職 | 性別 成績 父学歴 学校 父職 | 性別 学校 父学歴 成績 父職 |
| 私立4年 ↑ ↓ 国公立4年 | 判別成功率 | 70.6% | 70.3% | 77.9% | 68.9% | 64.6% | 68.3% | 70.2% | 62.8% | 64.4% |
| | 説明変数の規定力(偏相関)順位 | 学校 父職 成績 父学歴 性別 | 性別 父職 学校 成績 父学歴 | 成績 学校 父学歴 父職 性別 | 成績 父職 学校 父学歴 性別 | 成績 学校 父職 性別 父学歴 | 学校 父職 成績 父学歴 性別 | 成績 父職 学校 父学歴 性別 | 成績 父職 学校 父学歴 性別 | 学校 父職 成績 父学歴 性別 |

高1, 高2の段階で成績が《私立大か国公立大か》の選択に学校よりも大きい規定力を持つのを唯一の例外として、ここでとりあげた選択の全てについて、全学年にわたり第一位の規定力を持っている。

林の数量化 II 類による判別は、説明変数相互の無関連を前提としているが、第 II 章 A 節でもみたとおり、実は、中学において社会階層と成績ならびに社会階層と学校は正の関連を持っており、高校において社会階層と学校は正の関連を持っている。したがって、成績や学校を経由しての規定力を含めると、社会階層の規定力は、表 11 や 12 はあらわれたもの以上になるわけである。このことに留意したうえで、ここでわかったことを図にすると、中学と高校における進路選択のメカニズムを示すモデルができる。(図 6) 高校受験にあたっての高校の選択や、学科(普通科か職業科か)の選択を聞いた場合には、中学校段階で学校の規定力がもっと強まることは充分予想されるところであるが、今回の調査ではそこまで及ばなかった。

2. 職業選好のダイナミズム

質問 13 は、労働省職業研究所編の職業レディネス・テスト A 検査である。レディネス・テスト A 検査は、

39 種類の職業(仕事)の内容を説明し、それぞれに対する被験者の好みの程度を、「やりたい」「少しやりたい」「どちらともいえない」「あまりやりたくない」「やりたくない」の 5 段階で答えてもらうものである。(巻末調査票参照)

この A 検査は、もともとは個人の職業的発達を診断するのに用いるものであるが、ここでの目的はむしろ集団(性別、成績順位別、父職の学歴や職業別、学校別)間の比較を行ない、集団ごとの職業選好の特徴を把握することにある。そのためには、パーソナリティやその他の特性からくる個々人の反応の偏りを消去しておく必要がある。そこで、個人ごとに 39 の職業項目についての標準化を行ない、職業項目 j に対する素点 x_j (個人が○をつけた数字)を用いる代わりに、標準得点 z_j を用いることとした。つまり、職業項目 j に対する個人 i の標準得点 $z_{i,j}$ は

$$z_{i,j} = (x_{i,j} - \bar{x}_j) / s_j$$

ただし、

$$\bar{x}_j = \frac{1}{39} \sum_{i=1}^{39} x_{i,j}$$

表 11 進路の判別—中学 3 年, 高校 3 年, 普通科高校 3 年についての実際の計算結果

| | | 中学 3 年 | | | 高校 3 年 | | | 普通科高校 3 年 | | | |
|--------|-------------------------------------|--------|---------|--------|---------|--------|--------|-----------|--------|--------|--------|
| 外的基準 1 | | 就 職 | 短大・専修 | 私立4年 | 就 職 | 短大・専修 | 私立4年 | 就 職 | 短大・専修 | 私立4年 | |
| 平均 | | .5409 | .8909 | 1.2088 | .6637 | 1.1642 | .5234 | .9263 | 1.3054 | .5120 | |
| 外的基準 2 | | 進 学 | 4年制大学 | 国公立4年 | 進 学 | 4年制大 | 国公立4年 | 進 学 | 4年制大 | 国公立4年 | |
| 平均 | | -.4756 | -.6248 | -.2015 | -.7841 | -.3389 | -.5506 | -.4657 | -.3129 | -.4588 | |
| 相 関 比 | | .4483 | .7461 | .4935 | .7214 | .6282 | .5368 | .6568 | .6391 | .4847 | |
| 判別成功率 | | 67.0% | 81.7% | 77.9% | 79.1% | 81.8% | 68.3% | 79.0% | 77.9% | 64.4% | |
| 性 別 | 偏 相 関 | .0558 | .4542 | .1364 | .0348 | .4590 | .0157 | .0635 | .4906 | .0195 | |
| | 男 | .1174 | -.5056 | -.1821 | -.0217 | -.4273 | .0136 | .0546 | -.4883 | .0202 | |
| | | 女 | -.1062 | .4273 | .3372 | .0525 | .9788 | -.0497 | -.1017 | .9606 | -.0667 |
| 成 績 | 偏 相 関 | .3080 | .5612 | .3987 | .0793 | .1727 | .1993 | .0564 | .1323 | .2115 | |
| | 下 中 上 | 位 | .8591 | 1.1336 | 5.4661 | .0646 | .2840 | .3897 | -.0358 | .2351 | .4472 |
| | | 位 | .0237 | .1198 | .4242 | .0139 | -.0439 | .0198 | .0593 | -.1122 | .0312 |
| | | 位 | -1.0551 | -.7608 | -.5426 | -.1631 | -.3226 | -.5006 | -.1117 | -.1076 | -.6489 |
| 学 校 | 偏 相 関 | .1838 | .1352 | .2489 | .6375 | .4873 | .4866 | .5585 | .4475 | .3877 | |
| | A校 B校 C校 D校 E校 | -.4077 | -.1327 | -.5210 | -1.2773 | -.4847 | -.6296 | -.9061 | -.3612 | -.5093 | |
| | | .5060 | -.0323 | .6798 | -1.0344 | -.4558 | -.2671 | -.5745 | -.3146 | -.1071 | |
| | | -.1038 | .1624 | .0380 | .2480 | .8366 | 1.4404 | .8912 | 1.0823 | 1.7737 | |
| | | | | | .6909 | 1.5214 | 2.1688 | | | | |
| | | | | | .9645 | .6458 | 1.8899 | | | | |
| 父 職 | 偏 相 関 | .1760 | .3541 | .1471 | .1650 | .1045 | .2408 | .1326 | .0798 | .2497 | |
| | 農・運・技 販, サービス 事務, 保安 専・管 理 | .1058 | .4249 | -.3341 | .14350 | .1777 | -.6053 | .1422 | .0222 | -.7316 | |
| | | .6593 | .4677 | .5071 | .1610 | .0624 | -.0166 | .1920 | .2249 | -.0585 | |
| | | -.4483 | -.1639 | -.1964 | -.0990 | -.2152 | -.3283 | -.0047 | -.0450 | -.3881 | |
| | | -.1200 | -.4772 | .2593 | -.2424 | -.0122 | .4311 | -.2039 | -.0630 | .4945 | |
| 父 学 歴 | 偏 相 関 | .1599 | .1316 | .1987 | .1971 | .2087 | .0554 | .2542 | .2370 | .0457 | |
| | 初 中 高 | 等 | .2494 | -.1775 | -.7543 | .3082 | .1904 | .2052 | .5540 | .4746 | .2130 |
| | | 等 | .1338 | -.0329 | .2497 | -.1392 | .1577 | .0141 | -.1606 | .1006 | .0091 |
| | | 等 | -.6347 | .1833 | -.0591 | -.1217 | -.4337 | -.1093 | -.2251 | -.4193 | -.0930 |

$$s_i = \sqrt{\frac{1}{39} \sum_{j=1}^{39} (x_{i,j} - \bar{x}_i)^2}$$

で求められる。この標準得点は、個人的な偏倚（イデオロクラシー）を消したうえでの職業項目に対する選好得点である。したがって、例えば、成績順位が下の生徒集団の $z_{i,j}$ の集団平均と、上の生徒集団の $z_{i,j}$ の集団平均を比べることは、より正確な集団プロフィールの比較になり、職業項目 j の選好に対する成績順位の影響力を確かめることになるのである。

そこで次に、39の職業項目のそれぞれについて、成績

順位、学校、父親の学歴、父親の職業による分散分析（サブグループの平均値の有意差判定）を行なった。その結果は次のとおりである。

①中学、高校を通じて、父親の学歴や父親の職業によって、標準（修正）得点の平均値に有意差のみられる職業項目は、ほぼ皆無であった。つまり、社会階層は中・高校生の職業選好にほとんど直接的影響力を持たない。

②中学においては成績順位が、高校においては学校が、職業選好に対する最大の規定要因である。そして、中学における成績順位よりも、高校における学校（どの学校に所属するか）の方が影響力がはるかに強い。

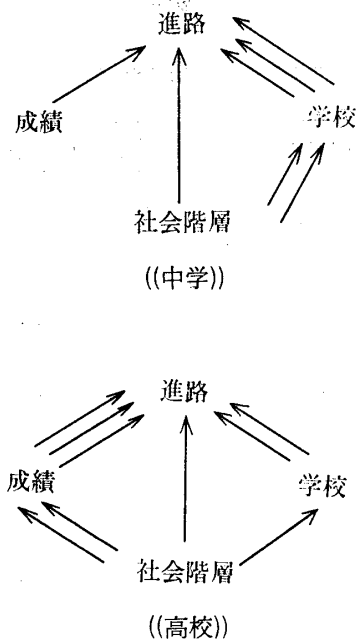


図 6 中学と高校における進路選択のメカニズム
 (注) 成績とは学校内の成績順位 (自己申告) をさ
 す→線は規定力をあらわす

②の内容をもう少し細かくみてみよう。表 12 は、中学について、成績順位 (上, 中, 下) による分散分析を行なった結果、5% 水準で有意差があった職業項目について、その数値を示したものである。この表から次のことがわかる。

③中学において、職業選好に対する成績順位の影響力は学年進行とともに強まる。

④成績上位者ほど、専門・技術職への選好を強める。下位者は、技能的職業への選好が若干目立つがなお選好がはっきりしない。(表 12 の中学 3 年について、成績上位者→中位者→下位者の順に「やりたい」と答える傾向の強いものを挙げると、自然科学研究者、教員、雑誌編集者、医療技術者、コンピュータ・プログラマー、タイピスト、カウンセラー、一般事務員、管理者、外科医・歯科医、広告マン、図書館司書、などである。逆に、下位者→中位者→上位者の順に「やりたい」と答える傾向の強いものを挙げると、エンジン修理工、ウェ이터・ウェイトレス、美容師理容師、調理師、デパート販売員などである。)

表 13 は、高校について、成績順位と学校による分散分析を行なった結果、5% 水準で有意差のみられた職業項目について、その数値を示したものである。この表から次のことがわかる。

⑤いわゆるランクが上の高校の生徒ほど、専門・技術職への選好が強い。(表 13 で、概ね A→B→C→D, E の

順に「やりたい」と答える傾向の強いものを挙げると、自然科学研究者、教員、雑誌編集者、広告マン、カウンセラー、医療技術者、外科医・歯科医、農事試験場技師、インタヴューアー、図書館司書、農業従事者、などである。中学 3 年で、成績順位→中位→下位の順に選好度の高かった職業とほとんど重複している。) 職業選好への影響力の点では、中学における成績順位と、高校におけるランクが似通っていることを示している。

⑥職業科高校、特に工業高校は、カリキュラムの性格に対応した職業選好を示す。(工業高校 E 校が 6 校中で最大の選好度を示す職業は・パイロット、エンジン修理工、コンピュータ・オペレーター、管理者、トレーサー、機械修理工、カメラ組立工、コンピュータ・プログラマー、機械保守作業員などである。商業高校 D 校が 6 校中で最大の選好度を示す職業は、調理士、商品デザイナー、動物飼育訓練士、経理事務員、デパート販売主任、美容・理容士などである。工業高校 E 校の職業選好は工業科のカリキュラムの特徴を反映しているが、商業高校 D 校の職業選好は、むしろ女性向きの仕事への好みを反映している。)

⑦工業高校 E 校が 6 校中で最大の選好度を示した職業について、学年別に選好度の変化を追ってみると (表 14)、学年進行とともに選好が強まるというよりも、1 年時から既に選好が高く、そのまま横ばいか下降するというパターンが多い。これは、他の学校での学年変化には見られない、特異なパターンである。つまり、工業高校への入学そのものによって、工業高校生は特定の職業的アイデンティティーを身につけるものと思われる。

III. まとめと今後の課題

調査からの知見は、第 II 章のそれぞれにおいて箇条書きにまとめてあるので、繰り返しを避け、重要な点だけについて触れておきたい。

①第 II 章 A 節では、中学において学校内成績順位と親の社会階層が正相関するが、高校においてはその関連を打ち消すような力が働いていることを指摘した。そのような力として第一に教科の特質が考えられるのでないかと推察した。つまり、成績順位にとって重要な数学、英語のうち、特に数学は、高校の段階で、家庭の文化的資本の影響を受けたくないような特質を持つのでないか、ということである。(図 1 の教科構造モデル) 高校で、成績順位と親の階層との関連を打ち消す第二の力として考えられるのは、高校の各学校が「輪切り選抜」の結果として、学力・能力水準の接近した生徒を集める同

表 12 成績と職業選好の関連 (中学) — 成績上位者, 中位者, 下位者の選好得点の平均と F 値 (5% 水準で有意な差のあるもののみ)

| 職 業 | 1 年 | | | | 2 年 | | | | 3 年 | | | |
|-------------------|----------|------|-------|-------|----------|------|------|-------|----------|------|------|-------|
| | 修正得点の平均値 | | | F 値 | 修正得点の平均値 | | | F 値 | 修正得点の平均値 | | | F 値 |
| | 下位 | 中位 | 上位 | | 下位 | 中位 | 上位 | | 下位 | 中位 | 上位 | |
| 1. 雑誌編集者 | | | | | | | | | .25 | -.19 | -.35 | 8.45 |
| 2. 教員 | .06 | -.51 | -1.05 | 16.24 | .09 | -.27 | -.55 | 5.80 | .13 | -.35 | -.69 | 11.17 |
| 3. 機械保守作業員 | .47 | .41 | .67 | 3.28 | .23 | .50 | .50 | 3.22 | .29 | .67 | .60 | 7.84 |
| 4. コンピュータ・オペレーター | | | | | | | | | | | | |
| 5. 管理者 | | | | | -.04 | -.23 | -.52 | 4.40 | .05 | -.14 | -.37 | 3.89 |
| 6. タイピスト | | | | | | | | | .12 | -.17 | -.25 | 4.10 |
| 7. 電話交換手 | | | | | | | | | | | | |
| 8. 一般事務員 | | | | | | | | | .18 | .00 | -.24 | 3.91 |
| 9. デパート販売主任 | .94 | .79 | .63 | 5.68 | | | | | | | | |
| 10. テーラー | | | | | | | | | .19 | .38 | .53 | 3.42 |
| 11. デパート販売員 | -.27 | -.07 | .08 | 3.44 | -.25 | -.04 | .23 | 5.38 | -.16 | .06 | .37 | 6.57 |
| 12. パイロット | | | | | | | | | | | | |
| 13. 機械修理工 | | | | | | | | | .02 | .38 | .49 | 7.09 |
| 14. 美容・理容師 | .05 | -.01 | .08 | 5.60 | | | | | -.62 | -.25 | .16 | 10.81 |
| 15. スチュワデス | | | | | | | | | | | | |
| 16. 経理事務員 | | | | | | | | | | | | |
| 17. ウェイター・ウェイトレス | | | | | | | | | -.51 | -.03 | .24 | 13.59 |
| 18. インタヴェアー | | | | | | | | | | | | |
| 19. 保母 | | | | | | | | | | | | |
| 20. 自然科学研究者 | .17 | -.14 | -.52 | 7.89 | .10 | -.12 | -.49 | 6.18 | .16 | -.13 | -.69 | 12.91 |
| 21. カメラ組立工 | | | | | | | | | | | | |
| 22. 展示案内係 | -.14 | .12 | .13 | 3.20 | | | | | | | | |
| 23. セールスマン | .49 | .69 | .69 | 3.77 | .43 | .72 | .69 | 6.38 | .53 | .81 | .94 | 9.04 |
| 24. 農業従事者 | | | | | | | | | | | | |
| 25. トレーサー | | | | | | | | | | | | |
| 26. コンピュータ・プログラマー | .31 | -.07 | -.28 | 7.84 | .36 | -.13 | -.17 | 8.19 | .27 | .10 | -.27 | 6.08 |
| 27. タレント | | | | | | | | | | | | |
| 28. カウンセラー | | | | | | | | | .24 | -.01 | -.10 | 4.43 |
| 29. 保健婦 | | | | | | | | | | | | |
| 30. 医療技術者 | | | | | | | | | .26 | -.03 | -.32 | 7.61 |
| 31. 商品デザイナー | | | | | -.11 | -.40 | -.04 | 5.62 | | | | |
| 32. 広告マン | | | | | | | | | .14 | -.13 | -.06 | 3.48 |
| 33. 農事試験場技師 | | | | | | | | | | | | |
| 34. エンジン修理工 | | | | | -.38 | .03 | .06 | 3.75 | -.48 | .26 | .28 | 17.07 |
| 35. 調理師 | -1.16 | -.75 | -.72 | 4.56 | | | | | -1.12 | -.74 | -.42 | 9.49 |
| 36. レース刺しゅう工 | | | | | | | | | | | | |
| 37. 外科医・歯科医 | | | | | .19 | .12 | -.46 | 10.24 | .21 | .02 | -.24 | 3.74 |
| 38. 動物飼育訓練士 | -.83 | -.51 | -.20 | 5.56 | | | | | | | | |
| 39. 図書館司書 | | | | | | | | | -.02 | -.22 | -.40 | 3.30 |

(注) 選好 (修正) 得点は, マイナス方向が〈やりたい〉プラス方向が〈やりたくない〉を示す。

表 13 職業選好の成績差，学校差（高校）——成績順位別平均値と F 値，学校別平均値と F 値（5% 水準で有意な差のあるもののみ）

| 職 業 | 修正得点平均値（成績別） | | | | 修正得点平均値（学校別） | | | | | F 値 |
|--------------------|--------------|------|------|-------|--------------|------|------|------|-------|-------|
| | A 校～C 校（普通科） | | | F 値 | 全 5 校 | | | | | |
| | 下位 | 中位 | 上位 | | A 校 | B 校 | C 校 | D 校 | E 校 | |
| 1. 雑誌編集者 | | | | | -.46 | -.36 | -.49 | -.11 | .07 | 16.55 |
| 2. 教 員 | | | | | -.73 | -.60 | -.44 | -.26 | -.25 | 8.50 |
| 3. 機械保守作業員 | .44 | .57 | .61 | 3.42 | .53 | .68 | .45 | .42 | -.16 | 50.39 |
| 4. コンピュータ・オペレーター | | | | | -.36 | -.19 | -.23 | -.15 | -.72 | 16.30 |
| 5. 管理者 | | | | | -.44 | -.28 | -.22 | -.54 | -.72 | 14.74 |
| 6. タイピスト | | | | | .18 | .00 | -.09 | .08 | .27 | 7.87 |
| 7. 電話交換手 | | | | | .54 | .36 | .32 | .29 | .41 | 4.18 |
| 8. 一般事務員 | | | | | .16 | .02 | -.02 | .12 | .24 | 5.07 |
| 9. デパート販売主任 | | | | | -.05 | .11 | .10 | -.15 | .18 | 10.06 |
| 10. テーラー | | | | | .62 | .47 | .43 | .46 | .54 | 3.08 |
| 11. デパート販売員 | | | | | .45 | .48 | .45 | .12 | .41 | 14.08 |
| 12. パイロット | | | | | -.70 | -.60 | -.62 | -.69 | -1.26 | 22.07 |
| 13. 機械修理工 | | | | | .31 | .25 | .29 | .03 | -.60 | 62.44 |
| 14. 美容・理容師 | .06 | .15 | .33 | 4.42 | .38 | .18 | -.01 | -.12 | .10 | 12.36 |
| 15. スチュワデス | | | | | .29 | .10 | .08 | .14 | .35 | 6.86 |
| 16. 経理事務員 | | | | | .24 | .14 | .04 | -.16 | .33 | 17.70 |
| 17. ウェイター・ウェイトレス | | | | | .53 | .46 | .32 | .25 | .49 | 7.44 |
| 18. インタヴェアー | | | | | -.15 | -.14 | -.09 | .03 | .31 | 14.13 |
| 19. 保 母 | | | | | .23 | -.09 | -.05 | .06 | .39 | 13.97 |
| 20. 自然科学研究者 | -.44 | -.53 | -.90 | 10.66 | -.88 | -.54 | -.39 | -.23 | -.69 | 17.94 |
| 21. カメラ組立工 | | | | | .12 | .14 | .09 | .02 | -.48 | 26.91 |
| 22. 展示案内係 | | | | | .52 | .49 | .42 | .37 | .58 | 5.44 |
| 23. セールスマン | | | | | — | — | — | — | — | — |
| 24. 農業従事者 | | | | | -.05 | .04 | .08 | .21 | .17 | 3.26 |
| 25. トレーサー | | | | | -.25 | -.28 | -.22 | -.12 | -.69 | 16.53 |
| 26. コンピューター・プログラマー | -.05 | -.16 | -.50 | 11.44 | -.37 | -.23 | -.03 | .04 | -.40 | 12.76 |
| 27. タレント | -.20 | .02 | .02 | 3.68 | — | — | — | — | — | — |
| 28. カウンセラー | | | | | -.22 | -.01 | -.02 | -.01 | .17 | 8.35 |
| 29. 保健婦 | | | | | .23 | .27 | .33 | .36 | .48 | 6.32 |
| 30. 医療技術者 | | | | | -.24 | -.25 | .02 | .17 | .28 | 22.87 |
| 31. 商品デザイナー | -.41 | -.33 | -.18 | 3.25 | -.28 | -.32 | -.37 | -.61 | -.23 | 8.80 |
| 32. 広告マン | | | | | -.34 | -.29 | -.24 | -.26 | .00 | 7.11 |
| 33. 農事試験場技師 | | | | | -.16 | -.09 | .03 | .09 | .03 | 3.94 |
| 34. エンジン修理工 | -.17 | .01 | .03 | 3.38 | -.08 | .03 | -.06 | -.25 | -.97 | 47.12 |
| 35. 調理師 | | | | | -.32 | -.45 | -.60 | -.69 | -.23 | 12.61 |
| 36. レース刺しゅう工 | | | | | .41 | .24 | .17 | .41 | .65 | 15.76 |
| 37. 外科医・歯科医 | | | | | -.17 | -.02 | .28 | .26 | .16 | 11.32 |
| 38. 動物飼育訓練士 | | | | | -.10 | -.28 | -.16 | -.36 | -.26 | 3.13 |
| 39. 図書館司書 | .04 | -.23 | -.26 | 7.72 | -.03 | -.13 | -.25 | .17 | .30 | 21.83 |

表14 E校(工業高校)の職業選好の学年推移
—6校中、E校が最大の選好度を示した
職業について

| | 1年 | 2年 | 3年 |
|-------------------|-------|-------|-------|
| 12. パイロット | -1.30 | -1.21 | -1.26 |
| 34. エンジン修理工 | -1.07 | -0.84 | -0.10 |
| 13. 機械修理工 | -0.77 | -0.46 | -0.56 |
| 21. カメラ組立工 | -0.68 | -0.37 | -0.36 |
| 4. コンピュータ・オペレーター | -0.59 | -0.96 | -0.60 |
| 25. トレーサー | -0.84 | -0.81 | -0.39 |
| 5. 管理者 | -0.55 | -0.83 | -0.79 |
| 3. 機械保守作業員 | -0.28 | -0.01 | -0.21 |
| 26. コンピュータ・プログラマー | -0.30 | -0.61 | -0.28 |

質的 (homogeneous) 構成をとっているということである。(図1の組織構造モデル)

このどちらが有力なモデルかを確かめることは重要な課題である。なぜなら、もし後者だとすれば、第II章C節の図6で見たように、高校では親の階層は学校を経由して(つまり、「輪切り選抜」によって高校の各学校の社会階層構成は学校格差に応じた差異を持つため)子どもの進路選抜に影響するのであるから、せっかく「輪切り選抜」の存続によって成績と親の階層の関連を無くしたとしても、高校卒業後の進路に対する親の階層の影響力は、全体としては変化がないことになる。これに対し、もし前者だとすれば、中学校タイプのスクーリングを延長して、そこに文化的資本に非親和的な教科を投入して成績順位と親の階層との関連を消去することにより、卒業後の進路に対する親の階層の影響を弱めることができる(なぜなら、図6の中学校の進路選択メカニズム・モデルでは、学校を経由する影響経路はないから、階層と成績の経路が断たれば、進路に対する階層の作用は大幅に減ることになる)からである。

教科構造モデルが正しいか、組織構造モデルが正しいかは、今後、格差構造の激しい高校システムと、緩やかなシステムの比較などをして確かめていく必要がある。

②第II章B節では、まず第一に、中学においてよりも高校において、生徒の自我同一感や生活の本来感の本物になると指摘した。これは恐らく、ほぼ全部が、年令的成熟や中学からの累積による効果であろうから、総合制システム対分岐システムの問題には関わりがない。だが第二の知見には大いに関わりがある。第二の知見とは、従来の考えでいけば底辺ランクに位置づけられる職業科高校においてむしろ、自我同一感や生活の本来感の意識類型が見出される、ということである。これまで

は、職業科高校には学校不適應者が集積し、非行その他の逸脱行動の温床である、との認識が一般的であり、それが職業科の廃止や高校義務化の1つの論拠ともなっていた。今回の知見は、この従来の常識とは、若干趣を異にしている。これがどの程度一般化可能なのか、更に追試が必要である。

③第II章C節では、まず第一に、中学での進路選択には学校内成績順位の規定力が大きく、高校では所属する学校の規定力が大きいこと、それと照応するかのようにより、職業選好も中学では成績順位に大きく左右され、高校では所属する学校の如何によってはなはだしく左右されること、を指摘した。これも、高校の格差構造が大きい場合と、小さい場合でどのように違ってくるか、追試が必要である。第二に、極めて重要な事実であるが、工業高校生徒の職業選好は、特異なダイナミズムを有することが指摘された。工業高校生は第一学年時に、既に一挙に職業的アイデンティティを身につけているのである。これはJ・マイヤーの言うチャーター効果(Charter effect)⁴⁾を彷彿とさせる現象であり、ぜひ追試が必要である。なぜなら、もし、専門教科の学習をはじめとする学校内の諸過程よりも、工業高校自体の持つ象徴的意味の方が影響力が大きいとするならば、教授=学習過程を含む学校内の諸過程が持っている教育力への信頼に基礎を置く総合制モデルは、少なくとも技能労働者の養成において大きな力を持ち得ないことになるからである。

以上、今回の調査からは、相互に矛盾し合う政策的インプリケーションを持つ幾つかの知見が得られた。それらの再点検、新たな調査による確認等、今後に残された課題は多い。

注

- 1) 潮木守一他『高校教育義務化の可能性に関する基礎的研究』トヨタ財団助成研究報告書、1979、10、参照。
- 2) Roy Carr-Hill, Olav Magnussen: Indicators of Performance of Educational Systems. OECD, Paris, 1973, 参照。時に第II章、第1節。
- 3) イギリスにおけるそのような研究のレビューとして、William Tyler: The Sociology of Educational Inequality, London, Methuen, 1977及びPaul Bellaby: The Sociology of Comprehensive Schooling, London, Methuen, 1977参照。
同じ系譜の最新のものとしては、A. H. Halsey, (et al.): Origins and Destination-Family, Class, and Education in Modern Britain, Oxford, Clarendon Press, 1980, 参照。特に、第9章。
- 4) A 検査の利用については職業研究所川上善郎氏の御協力と御指導をいただいた。
- 5) Meyer, J. W.: "The Effects of Institutionalization of Colleges in Society", in Feldman, K. A. (ed.): College and Students, 1972

- g. 学校の授業は時間のむだだと思ふことがある 1. はい 2. いいえ 36
- h. 友だちや部などの仲間と議論したり実験・製作したりするほうが授業よりも楽しい 1. はい 2. いいえ 37
- i. 自分は先生にきらわれていると思う 1. はい 2. いいえ 38
- j. 受験や勉強のために、やりたくてもできないことがいっぱいある 1. はい 2. いいえ 39
- k. 先生や親の期待にこたえるために勉強しなくてはと思うことがある 1. はい 2. いいえ 40
- l. 試験でよい点をとると、友だちに優越感を感じることもある 1. はい 2. いいえ 41
- m. 今の学校の試験では自分の能力ははかれないと思う 1. はい 2. いいえ 42

- Q 4. 現在のあなたの生活はどんな感じですか。次の a ~ d のそれぞれについて、あてはまるほうの番号に○をつけてください。
- a 43
 - 1. 時間におわれている感じ
 - 2. かなり自分なりに自由にやっている感じ
 - b 44
 - 1. 一日一日が充実している感じ
 - 2. 毎日がむなしくすきていく感じ
 - c 45
 - 1. 今の自分はなにかほんとうの自分でない感じ
 - 2. 自分らしく生きているとなっとくできる感じ
 - d 46
 - 1. 今の生活は将来の自分とのつながりがはっきりしない感じがする
 - 2. 今の生活は将来の自分にとって有意義な感じがする

- Q 5. 次にあげるもののうち、あなたの考えや感じにあてはまるものがあればいくつでも○をつけてください。
- 47 1. なにをするにも自分からはすんでする気にならない
 - 48 2. ものごとに感動することはめったにない
 - 49 3. 毎日あれこれやっているのになんかつかない感じがする
 - 50 4. なんとなく神経がすりへった感じだ
 - 51 5. いつもなんとなくだるい感じがする
 - 52 6. 現在一番したいことが何なのか自分でもわからない
 - 53 7. また失敗するのではないかといつも不安だ
 - 54 8. どうせ自分はだめな人間だと思う

- Q 6. あなたはこの学校での生活についてどのように感じていますか。次の a ~ g のそれぞれについて、あなたの考えにあてはまるなら 1. はいに、あてはまらないなら 2. いいえに○をつけてください。
- a. この学校の生徒であることにはこりを感じる 1. はい 2. いいえ 51
 - b. この学校にはどうしてもとけこめない 1. はい 2. いいえ 52
 - c. この学校は自分によく合っている 1. はい 2. いいえ 53
 - d. この学校には親しみのもてる先生がいる 1. はい 2. いいえ 54
 - e. この学校にいて危険を感じることもある 1. はい 2. いいえ 55
 - f. この学校には信用して相談できる先生がいる 1. はい 2. いいえ 56
 - g. この学校での生活にはほろあがある 1. はい 2. いいえ 57

- Q 7. あなたは自分の将来の進路や生活のことについて次のようなことをすることがあります。あてはまるものはいくつでも○をつけてください。
- 58 1. 自分の将来をあれこれ考えることがある
 - 59 2. 将来のことを友だちと話し合うことがある
 - 60 3. 将来のことについて先生に相談したりすることがある
 - 61 4. 将来のことについて父や母といろいろ話すことがある
 - 62 5. 学校の先輩や社会人にいろいろきくことがある
 - 63 6. 新聞や学習雑誌その他の本でいろいろ調べてみることもある
 - 64 7. あまり考えたことはない

- Q 8. あなたは次のようなことについてどのくらい知っていますか。よく知っていると思えるものはいくつでも○をつけてください。
- 65 1. どんな大学があるかについて
 - 66 2. 大学の学部や勉強のことについて
 - 67 3. 大学での生活のことについて
 - 68 4. 各種学校や専修学校のすることについて
 - 69 5. いろいろな仕事につくための資格のことについて
 - 70 6. どんな会社があるかについて
 - 71 7. 社会のいろいろな仕事の内容について

- Q 9. あなたは自分の将来についてどのように感じていますか。次にあげたものの中からあなたの考えに最もよくあてはまるもの 1 つに○をつけてください。
- 72 1. 勉強が好きなので大学までいって学問をつづけたい
 - 2. 大学を出て社会の指導的な仕事をした
 - 3. 学歴がないと社会に出ても不利なので大学まで行きたい
 - 4. 学生生活を長く楽しみたいので大学へ行きたい
 - 5. 社会に出てうまくやっていると不安なので、できるだけ長く学校にいたい
 - 6. 勉強はあまり好きでないので早く社会に出たい
 - 7. 社会に早く出て自分の力をためてみたい
 - 8. 社会に早く出て経済的に独立したい
 - 9. あまり考えたことはない

- Q 10. あなたが希望する高校卒業後の進路は次の中のどれですか。あてはまるもの 1 つに○をつけてください。
- 73 1. 就職
 - 2. 家業・家のでつだい
 - 3. 各種学校・専修学校
 - 4. 短期大学
 - 5. 4 年制大学（私立）
 - 6. 4 年制大学（国公立）
 - 7. まだ決めていない
 - 8. その他（ ）

S Q (まだ決めていない人とのぞいて) 決めたのはいつ頃ですか。カッコ内に書いてください。

→

| | | |
|-----|-----|---|
| 小学校 | () | 年 |
| 中学校 | () | 年 |
| 高校 | () | 年 |

頃

- Q 11. あなたのお父さんやお母さんは、次のうちどの学校を出ていらっしゃいますか。お父さんお母さんそれぞれについてあてはまる番号を下に書き入れてください。
- 75 1. 旧制小学校
 - 76 2. 旧制中学校、実業学校、師範学校
 - 3. 旧制高校、高等専門学校、高等師範学校
 - 4. 旧制大学（大学院を含む）
 - 5. 新制中学校
 - 6. 新制高校
 - 7. 新制短大・高専
 - 8. 新制大学（大学院を含む）
 - 9. その他（具体的に）

お父さん →

お母さん →

Q12. あなたのお父さんはどのようなお仕事をなさっていますか。次のうちあてはまる番号1つに○をつけてください。

- 1. 専門・技術職関係の仕事（医師・薬剤師、技術者、教員、公認会計士、住職、デザイナー、記者など）
- 2. 管理職関係の仕事（役所や会社で課長以上の役職についている人、駅長、郵便局長、警察署長などを含む）
- 3. 事務関係の仕事（役所や会社、商店などで事務的な仕事をしている人、集金の仕事などを含む）
- 4. 販売関係の仕事（卸小売店主、飲食店主、不動産業、保険代理店、店員、セールスマンなど）
- 5. 農林漁業関係の仕事（植木・造園師、養殖関係などを含む）
- 6. 運輸通信関係の仕事（鉄道の機関士や運転士、自動車運転手、航空士、無線技術士、郵便配達など）
- 7. 技術・生産工程関係の仕事（機械の組立や修理、自動車整備、和洋服のしたて、時計・ラジオの修理、大工や左官、水道・ガス工事など）
- 8. 保安関係の仕事（警察官、消防士、自衛官など）
- 9. サービス関係の仕事（理・美容師、クリーニング、料理人、ホテル・旅館の従業員など）
- 10. その他（具体的に）

77

78

Q13. いろいろな「職業」や「仕事の内容」が次に書かれてあります。あなたは次の仕事のそれぞれについて、どれくらいやりたいと思いますか。やりたい、少しやりたい、どちらともいえない、あまりやりたくない、やりたくない、の5段階のどれかあてはまるところに○をつけてください。

- 1. 新聞や雑誌の編集の仕事で、特集のテーマを考え、自分でも実際に記事を書く。 7
- 2. 中学や高校の先生になって、自分の得意な学科を担当する。 8
- 3. デパートや大きなビルの冷暖房装置を調節したり、エレベーターやエスカレーターの装置に異常がないかを点検する。 9
- 4. 大きな会社や研究所でコンピュータ（電子計算機）の操作をしたり、故障した場合の修理をしたりする。 10
- 5. 部下と一しょに仕事をしながら、ひとりひとりの人柄や能力を正しく評価し、仕事の割り振りや監督をする。 11
- 6. 原稿をいねいに清書したり、正確にタイプしたりする。 12
- 7. 電話の交換台で親切に応答し、交換、取り次ぎをする。 13
- 8. 一定の方式どおりに、資料を集め、整理し、記録する。 14
- 9. デパートや専門店で、毎日の売上げや市場の状況を調べ、仕入れの計画を立てたり、新しい商品の売出し方法を考えたりする。 15
- 10. お客様の体格や注文に合わせて洋服の寸法をとり、生地を裁断して縫い、洋服に仕上げる。 16
- 11. デパートや商店で、客の注文をきいたり、品物の説明をして商品を売る。 17
- 12. 資格をとって、船や飛行機などをじょうずに操縦する。 18
- 13. オートメーション工場で、機械や装置が正常に働くように計器類を監視し、必要に応じ調整をする。 19
- 14. 美容院や理髪店で、お客様の髪を散髪したり、きれいにセットする。 20

- 15. 旅客機や観光バスに乗って、乗客への案内や各種のサービスをする。 21
- 16. 会社や商店で、売り上げ伝票や給料の計算をしたり、帳簿の整理や管理をする。 22
- 17. 西洋料理の店などで、客の注文を受けたり、注文の料理をテーブルに運んだりする。 23
- 18. いろいろな人にインタビュー（面接）をして、じょうずに話を引き出し、その人の経験談や意見などを聞く。 24
- 19. 保育園で乳幼児の世話をしたり、幼稚園の先生になって、園児に歌や踊りを教えたり、いっしょに遊んだりする。 25
- 20. 新しい機械を設計したり、学問の世界で新しい理論を作ったりするなど、だれも手がけていない分野を開拓する。 26
- 21. カメラ、時計など精密機械の部品を組み立てたり、できあがった製品の検査をする。 27
- 22. 展示会場などで、お客様の受付や接待をしたり、デパートの案内所で、お客様に売場の案内をする。 28
- 23. 会社や家庭を訪問して、特定の製品や商品について説明し、買ってもらうようにすすめる。 29
- 24. 畑を耕したり、除草、害虫駆除の作業をしたり、果物などを摘む作業をする。 30
- 25. 定規やコンパスなどを使って設計図を写すなど、製図の仕事をする。 31
- 26. 会社や工場、研究所などで、コンピュータ（電子計算機）を使ってむずかしい計算をする。 32
- 27. 大勢の観衆の前で演技をしたり、自分の特技を見せて、観衆を喜ばせる。 33
- 28. 仕事や勉強や生活の悩みごとについて、働く人や生徒の相談ののり、悩みを解決してあげる。 34
- 29. 家庭を訪問して、保健衛生などについて、相談ののりたり指導をしたりする。 35
- 30. 医師が病気の診断や治療するのに必要な血液や尿などの医学的検査をしたり、輸血に必要な血液型の判定を行なう。 36
- 31. 新しい商品のデザインや、店の装飾や商品の陳列などを考える仕事をする。 37
- 32. 広告会社に勤めて、新しい広告方法を考え出したり、いろいろな広告の効果を研究する。 38
- 33. 農園や農事試験場などで、農作物の品種改良をするために、いろいろな条件を変えて栽培したり、各種の実験をする。 39
- 34. 自動車や船のエンジンなどについての知識を身につけ、これらの部品を点検し、分解修理、調整、整備をする。 40
- 35. 高級な料理やケーキなどを、じょうずにきれいに作る。 41

36. ミシンを使って、洋服などにきめられたしゅうをしったり、レース編みでテーブルクロスや手袋を編む。 □ 42
37. 外科医や歯科医になって、指先や手を器用に使い、手術をしたり、治療をしたりする。 □ 43
38. 鱸や金魚を飼育したり、犬や鳩を訓練するなど、動物相手の仕事をしする。 □ 44
39. 図書館や、研究所の図書室などで、本を整理・分類し、図書カードを作る。 □ 45

(最後に、私立学校の生徒のみなさんにうかがいます)

Q 4. 現在あなたのいる学校を選んだのはおもに誰の意見だったでしょうか。あてはまるもの1つに○をつけてください。

- | | |
|---|------|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 父や母 2. 兄や姉 3. 小学校の先生 4. 親せきの人 5. 自分 6. その他(具体的に書いてください) | □ 46 |
|---|------|

S Q それはおもにどう理由だったでしょうか。下のカッコ内にできるだけ詳しく書いてください。

() □ 47

これでおわりです。長い間どうもごころうさまでした。